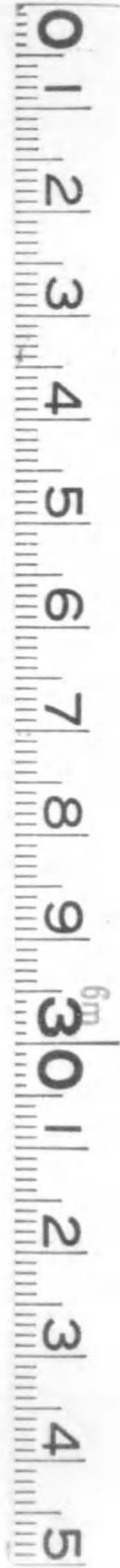




325

526



始



14.12.24

325

526

加藤吐堂
峯玄光 共著

禪學八面觀

東京 明治出版社藏版

325-526

禪學八面觀

加藤 玄光 共著

東京 明治出版社藏版

大正
6. 9. 3
内交

序言

元是天上一輪の月、然もその影を水中に印するや、百千萬なるを知らず。その江たると、河たると、瀆たると、壘たると、鬩たると、涪たるとを擇ばず、凡そ水の有る處必ず月有らざるは無し。禪も亦たかくの如きか。

今、擧して八面觀を説く、婆言婆説、僅にその一端を示すのみ。若しそれ本眞

を會するあらんか、百草頭上無邊の春、拈來りて不是あることなかるべし。冀くは、好道の士、水中の影を逐うて、天上の月を忘失すること勿れ。

大正丁巳立秋日

著者識

禪學八面觀目次

一 禪と修養……………一
 禪の工夫。修禪の階級(十牛)。禪の倫理。四料簡大意。五位大意。坐禪の作法。調息の法。公案。

二 禪と死生……………二二
 自家頭上の問題。道元の無常觀。白隱の死の拈提。穆山の回顧。生首の要求。一靜百動を制す。白双下の說法。病中の工夫。尊貴なる一日。生死と涅槃。古禪僧の遺偈。

三 禪と健康……………四七
 發病の十因。横死の九因。澡浴の利益。嚼楊枝の利益。掃地の利益。經行(運動)の利益。食事の道德的意義。白隱の強健法。穆山の健康法。悟由の健康法。

四 禪と武士道……………七四

武士道の萌芽とその發達。禪と武士。時頼時宗の禪的感化。楠菊地兩氏の禪的感化。信玄謙信の禪的感化。大田島津大内前田等の禪的感化。鈴木正三と徳川武士。澤庵と徳川武士。山鹿素行大石義雄の禪的感化。諸大名の禪宗歸崇。

五 禪と劍道……………一〇八

劍道の起原。劍道の流派。宮本武藏。澤庵と柳生宗矩。不動智。應無所住而生其心。劍道の目的。山岡鐵舟の劍禪。鐵舟と滴水。勝海舟の劍禪。

六 禪と文學(上、詩文)……………一三一

佛典と文學。詩禪一味。支那の巨匠。五山文學。雪村。虎關。義堂。絶海。圓月。圓旨。大智。五山文學の價値。黄檗禪と文學。心越。

七 禪と文學(下、和歌、謠曲、俳諧)……………一七〇

和歌禪。道元禪師。大田道灌。澤庵。烏丸光廣。無難。盤珪。白隱。天桂。玄樓。良寛。禪と謠曲。一休の謠曲。謠曲の價値。俳諧の特色。俳諧禪。松尾芭蕉。古池真傳。芭蕉以後の禪味俳味。

八 禪と繪畫……………二一〇

繪畫と宗教。密教的繪畫。繪畫に現はれたる禪の感化。雪舟。竹田。仙厓。風外。鐵翁。

九 禪と茶道……………二二八

茶の傳來。珠光の茶禪。利休の茶道。澤庵の茶禪。賣茶翁。伊井直弼の茶禪。

十 總括(禪學八面觀)……………二四七

千江有水有千江月。八面都無向背處。冷暖自知。唯心論。唯物論。汎神論。差別の當相。同體の妙味。異中の同。同中の異。却來底の消息。根本智を得よ。文藝繪畫と禪。劍道と禪。禪と

目次

附 錄

棒 喝 餘 韻

穆山禪師の畫讃。達磨の讚。心何んの似る所ぞ。伊達自得の和歌禪。不不庵の記。物外の俳句。鳥尾得庵洪川に擲掄せらる。伊藤博文環溪に小兒視せらる。伊達自得三晝夜にして拳頭の味を知る。仙厓黒田侯を誡む。松崎陸軍大尉原坦山に參禪す。宇和島侯晦巖に諷せらる。今北洪川の離別狀。近藤勇物外に折かる。山岡鐵舟獨園に擲掄せらる。お三婆と白隱。春日載陽。由利滴水と峩山。原坦山の臨終通知狀。鳥尾得庵の臨終。愚庵の遺言狀。湘煙女史の辭世。環溪と團十郎との唱和。

目 次 終

禪學八面觀

加藤 峯 咄 堂 共著
玄 光

禪 と 修 養

還丹の一粒、鐵を點じて金と成し、至理の一言、凡を轉じて聖と成す、是を以て、永嘉の玄覺は六祖に參じて一宿覺の名を得、蕪州の道信は三祖に謁して無繩自縛の言下に大悟す、而してその參究し大悟せし所のものは何ぞや、唯是れ「心」也、永嘉、自ら述べて曰く、

是を以て禪門は心を了却す、頓に無生に入るは知見の力なり、大丈夫慧劍を乗る、般若の鋒、金剛の鋭、但だ能く外道の心を摧くのみならず、早く會

禪の工夫

禪と修養

て天魔の膽を落却す(乃至)一性圓に一切の性に通じ、一法徧く一切の法を含む、一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝し、諸佛の法身我が性に入り、我が性還て如來と合す。

と、また丹霞の「翫珠吟」に曰く、

般若の靈珠妙にして測り難く、法性海中に親しく認得す、隱顯常に遊ぶ五蘊の中、内外光明にして大神力あり、此の珠大にあらず小にあらず、晝夜光明ありて皆悉く照す、覺むる時は物も無く又蹤も無し、起坐相隨て常に了たり、(乃至)森羅萬象光中に現じ、體用如々にして轉じて轉するにあらず、萬機消遣す寸心の中、一切時中巧みに方便す(乃至)龍女靈山にして親く佛に献じ、貧兒衣下幾たびか蹉跎す、亦た性と名け亦た心と名く、性に非ず心に非ず古今を超ゆ。

と、大なる哉心、妙なる哉心、呼んで「本來の面目」と云ひ「主人公」と云ふ、禪

は之を直覺するにあり、之を活捉するにあり、之を倒用横拈するにあり、禪の語たるや、具に云へば禪那、譯して靜慮と云ふ、妄念を靜めて實性を慮るなり、故に「定慧等學明見佛性」と云ふ、定にして慧なからんか、死水波なきなり、慧にして定なからんか、狂猿野に奔るなり、定慧相輔け相融して始めて明に佛性を見る、しかも是れ豈に尋常人の能くする所ならんや、大道由來南北の阻り無きも、人根に利鈍なきこと能はず、茲に於て三玄三要四料簡五位十牛等の爲人垂手の方便なきを得ず、中に於て廓庵の十牛、修證の道程を示して最も適切なるを見る。

廓庵禪師、一頭の露地の白牛を拈じ來りて吾人に示す、是れ黑白を以て論ずべからず、肥瘠を以て議すべからず、從來人々自家屋裡のもの、しかも久しく之を抛却し去る、茲に於て先づ驀直に之を探求し尋得せざるべからず、道元禪師曰く、

この法は人々分上にゆたかにそなはれりといへども、未だ修せざるにはあら

はれず、證せざるには得ることなし。

「尋牛」の要、茲に於てか起る、歌に

たづねゆく深山の牛は見えずして

たゞ空蟬の聲のみぞする

たづね入る牛こそ見えね夏山の

梢に蟬の聲ばかりして

心牛に逢着する豈に容易ならんや、古今參禪の客、若し正師を得ざれば、五里霧中に彷徨するのみ、しかも孜孜として休せず、兀々として靜思する所、僅に心牛の足跡を認む、所謂「見跡」なり。

心ざし高きみ山のかひありて

しをりのあとを見るぞうれしき

おぼつかない心づくしにたづねれば

行へも知らぬ牛のあとかな

しかも、未だ是れ足跡なり、東に求めんか、西に尋ねんか、猶ほ途中呻吟の客たるを免れず。

百千の古則公案黄卷赤軸は是れ心牛の足跡のみ、幸にして此の足跡により、漸くにして心牛を見るに至る、所謂「見牛」なり。

青柳の絲の中なる春の日に

つねはるかなる形をぞ見る

ほえけるをしるべにしつゝ荒牛の

かげ見る程にたづね來にけり

たゞ是れ見牛なり、未だ自家屋裡に牽得し來りたるにあらず、こゝに於て「得牛」の境に進まざるべからず。

はなさじと思へばいと心うし

これぞまことのきづななりけり

とり得ても何かと思ふ荒牛の

つなひくほどに心つよさよ

明鏡由來塵を惹き易く、菩提樹頭花開き難し、時々勤めて拂拭し、刻々に奮つて精進せずんば、何時しか、心牛の去つて跡なきに至らん、修道の事たるまた難い哉、故に牛を得たるものは、更に努めて之を馴致し訓練し、「牧牛」の境に進まざるべからず。

日かず經て野飼の牛も手馴るれば

身に添ふ影となるぞうれしき

たづね來し牧のうね牛とりえつゝ

かひかふほどにしづかなりけり

修してこの地に到る、事固より容易にあらざるも、未だ悠々自適の趣に達せず、茲に於て「歸牛歸家」の境致に入らざるべからず。

すみ上る心の空にうそぶきて

たちかへり行く峯の白雲

かへりみる遠山みちの雪消えて

心の牛に乗りてこそ行け

既に歸家穩坐底に至る、心牛の存すべき要なし、茲に於て心牛をも忘じ去る所謂「忘牛存人」なり。

よしあしと渡る人こそはかなけれ

ひとつ難波のあしと知らずや

しるべせん山路の奥のほらの牛

かひかふ程にしづかなりけり

忘牛存人の境、可なることは可なるも、未だに人の存するあるを奈何せん、更に進んで「人牛俱忘」の境に入らざるべからず。

雲もなく月も桂も木も枯れて

拂ひはてたるうはの空かな

本よりも心の法はなきものを

夢うつゝとは何をいひけむ

牛、忘じ來り、人忘じ去る、好箇の境地なり、しかれども、萬里寸草無き處、淨地人を迷はし、八方片雲無き時、晴空汝を賺すことを免れず、茲に於て踢一踢し去り「返本還源」の地に入らざるべからず。

法の道あとなき本の山なれば

松はみどりに花はしらつゆ

そめねども山は縁になりにつけり

おのがいろく花もなきなり

山は自ら高く、水は自ら長く、柳は縁に、花は紅、歴々分明なり、道元禪師曰く、

しるべし一切諸法悉皆解脱なり、諸法の空なるにあらず、諸法の諸法ならざるにあらず、悉皆解脱なる諸法なり。

と、かくのごとく淨智圓明にして如幻の諸法に對す、大悲の情湧然として起らざるを得ず、茲に於て慈悲爲人の手を垂れて荒草裡に入る、所謂「入塵垂手」なり。

手をたれて足はそらなる男山

かれたる枝に鳥やすむらん

身を思ふ身は心は苦しむる

あるに任せてあるぞあるべき

是れ固より痛棒下に參じ瞋拳頭を喫却して、修證するものにして、その境地

たるや、筆紙の詳にする所にあらず、しかれども道は一也、何れの道か尋牛なからん、何れの法か見牛なからん、之を證悟禪として見るも可、之を卑近なる意味に於ける修養禪として見るもまた妨げず、雲月はれ同じきも溪山各異る、各自家頭上の事々物々に契當し來らんか、その妙味の盡くべからざるものあらん。

禪の倫理

既に本來の面目を識得し、慈悲落草の手を垂る、六度十戒自ら備はり、(六度とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を云ひ、十戒とは、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不酤酒戒、不說過戒、不自讚毀他戒、不慳法財戒、不瞋恚戒、不謗三寶戒を云ふ) 倫理の道、道德の行、行はれすと云ふことなし、しかも倫理と云ひ道德と云ふ、皆是れ自家屋裡の光明にして強ひて他に模倣するにあらず、故に永嘉禪師は

頓覺了如來禪。六度萬行體中圓。

と示し、道元禪師は

諸惡莫作とねがひ、諸惡莫作とおこなひもてゆく、諸惡すでにつくられずなりゆくところに、修行力たちまちに現成す。

と云ふ、また拔隊禪師、禪の六波羅蜜を示して曰く

「布施」といふは、自性の靈光萬機を照し、應用あまねく施し、彼にありては彼に同じく是にありては是におなじく、あまる事なくかくる事なき是れなり。

「持戒」といふは、佛性もとより清淨にして、六根の主なりといへども六塵にそまらず、是れを悟る者、自然に身心相應して、正戒の相をもとらず、邪念の心をも起さざる是れなり。

「忍辱」といふは、佛性無爲にして、我人の相にあづからざるが故に、是れに相應する者は、それども怒らず、貴めども悦ぶ心なき是れなり。

「精進」といふは、佛性もとより衆徳をそなへて、一切の功徳を成就し、萬物

を生育し、未來際にとほりて滯ることなき是れなり。

「禪定」といつば、佛性眞常にして、動靜の諸相を離れ、宗をこえ、格をいで、聖凡の位に墮ちず、文字にかはらず、善惡の法量にまざる是れなり。

「智慧」といつば、佛性ひとり明にして、萬機を輝し、遍く聖凡の眼となること、日月の世界を照すが如くにして、古にわたり今にわたりて邊際なき眞の淨光是れ也。

この故に自性の妙用きはまりなき事、大海の波瀾の如し、一性の中に六般の神用あり。

と、されば六度と云ふも自己本來の面目の右轉左轉する所に外ならず、且らく之を稱して「禪の倫理道德」と云ふもまた妨げず。

既に本來の面目の右轉左轉なるが故に、盡未來際なり、白隱禪師曰く、

共走善知識輪下。擊破八識荒田島。

信受向上奪命符。劈破無明暗黑坑。

撞着惡毒熱鉗鎚。踏碎萬重玄關鎖。

而後莫得小爲足。必誓体正位取證。

永發不退大勇猛。常精修菩薩大行。

徧集無量大法財。尋常勤行大法施。

永鞭四弘誓願輪。利濟一切苦衆生。

同共成無上菩提。虛空盡弘願無盡。

これ無限の進修、無涯の行持なり。

更に去つて四料簡、五位を一瞥せんか、所謂、四料簡とは『臨濟錄』中の一節にして「奪人不奪境」、「奪境不奪人」、「人境俱奪」、「人境俱不奪」也、是れ固より法戰場中殺活自在の活作略を示したるものなるも、その中、自ら禪理の

髣髴すべきあり。

奪人丕奪境

心は是れ人、色は是れ境、今、人を奪び去つて境獨り存す。

大空に羽うちかはし飛ぶ雁の

かげさへ見ゆる秋の夜の月

鐘は鳴りやせぬ撞木が鳴るよ

撞木がなければ鳴りはせぬ

奪境丕奪人

是れ境を奪ひ去つて人のみ存す、所謂、宇宙無二双日、乾坤只一人、

夕涼みよくぞ男に生れたる

鐘が鳴るのよ撞木は鳴らぬ

鐘がなければ音はせぬ

人境兩俱奪

人境俱に奪ひ去らんか、人なく境なく主なく客なし。

雲もなく月のかつらの木もかれて

はらひはてたるうはの空かな

鐘もならない撞木もならぬ

鐘と撞木の間が鳴る

人境俱丕奪

無一物の處無盡藏、花あり、月あり、樓臺あり。

高き屋にのぼりて見れば煙立つ

民のかまどはにぎはひにけり

鐘もなりませぬ撞木も鳴るよ

鐘と撞木とで音がする

人境の奪不奪、却つて一場の閑葛藤たるなからんや、四料簡的々の大意如何。
唯是れ一杵の鐘聲

〇〇〇
ポーン

是れ人か是れ境か。

曹洞禪は主として五位を用ふ、所謂五位とは「正中偏」「偏中正」「正中來」「偏中至」「兼中到」是れなり、曹山大師曰く

正位は即ち空界にして本來物なし、偏位は即ち色界にして萬の形像あり、正中偏は、理に背いて事に就き、偏中正は、事を捨て、理に入る、兼帶は冥に衆縁に應じて諸有に墮せず、染に非ず、淨に非ず、偏に非ず、正に非ず、故に虛玄の大道、無着の眞宗と曰ふ

と、是れ固より功勳邊の事にあらず、直に法の端的を提示したるもの、固より筆舌の描出し難き所なるも、無邊俠禪の俚歌俗解、聊か、その萬一を髣髴する

の便に供せん。

如何是正中偏

來いと言ふたとて行かれよか佐渡へ(端的是正位)佐渡は四十九里波の上(是偏位)

如何是偏中正

鳥も通はぬ玄海灘も(端的是偏位)住めば都ちやノウモシこちの人(是正位)

如何是正中來

君にわかれて松原行けば松の露やら涙やら(端的是正中來)光景圓三兩位

如何是偏中至

君をおもへば千里も一里逢うて別れりや又千里(端的是偏中至)光景又圓三兩位

兩位ふたご

如何是兼中到

チ、ツンテン(言詮不及意思不到處一千七百則五千餘卷沒交涉)

提唱畢禮拜三百、空中聞妙樂、大地六種震動、佛天納受、可か以知也
可かなることは可かなるも、しかも、猶なほ是れ歌曲裡に墮だ在するもの、去さつて須すらく
一い絃未だ動うごかず、半句未だ發はつせざる那邊なへんに向むかつて參さんすべし。

修しゆして本來の面目めんもくを明あきらめ露地ろちの白牛びやくぎうを捉とらふる、必かならずしも一定ていの形式けいしきに依よらざ
るべからざるにあらざるも、その心こころを調ととへんと欲ほつせば、先まづその身みを調ととへざる
べからず、茲こゝに於おいて坐法ざはふの要起ようおこる、今いま、禪宗ぜんしゆに傳つたふる所ところに依よるに、道元だうげん禪師ぜんじ、
示しめして曰いはく、

坐禪の作法

尋常よつね、坐處ざしよには厚あつく坐物ざぶつを敷しき、上うへに蒲團ふとんを用もちゆ、或あるひは結跏趺坐けつかふざ、或あるひは半跏
趺坐ふざ、謂いはく、結跏趺坐けつかふざは、先まづ右みぎの足あしを以もつて左ひだりの脛むねの上うへに安あんじ、左ひだりの足あしを右

調息の法

の脛むねの上うへに安あんず、半跏趺坐はんかふざとは但ただ左ひだりの足あしを以もつて右みぎの脛むねを壓おさす、寛ゆるく衣帶えたいを
繫かけて齊整せいせいならしむべし、次つぎに、右みぎの手てを左ひだりの足あしの上うへに安あんじ、左ひだりの掌たなこを右
の掌たなこの上うへに安あんじ、兩りゆうの拇指たいし、面むかて相拄あひたふ、乃すなはち正身端坐しやうしんたんざして左ひだりに側たち右
に傾かたむき、前まへに躬まうり後うしろに仰あをぐことを得えされ、耳みみと肩かたと對たいし、鼻はなと臍へそと對たいせしめ
んことを要えす、舌したは上うへの脛むねに掛かけて、唇齒相着しんしあひつけ、目めは須すく常つねに開ひらくべし、鼻息びそく
微かすかに通つうじ、身相しんさう已すでに調ととうて、欠氣かんき一息そくし、左さ右う搖振しんして兀こつ々くとして坐定ざぢやうす。
と、坐相ざさう既すでに調ととふるも、境きやうにしてその處ところを得えざらんか、その目的もくてきを達たつせず、境
可かなるも、調息安心てうそくあんしんの法はふを錯あやらんか、また不可ふかなり、故ゆゑに瑩山けいざん禪師ぜんじ示しめして曰いはく、
凡おほそ坐禪ざぜんの時ときは牆壁しやうき禪倚ぜんい及び屏障へいしやう等に靠倚こくいすべからず、又また、風烈かぜはげしき處ところに當あたつ
而しかして打坐だざすること莫なれ、高顯かうけんの處ところに登のぼりて打坐だざすること莫なれ、皆發病みなはつびやうの因緣いんねん
也、若なりし、坐禪ざぜんの時とき、身み、或あるひは熱ねつするが如ごとく、或あるひは寒さむきが如ごとく、或あるひは澁じちなる
が如ごとく、或あるひは滑かつなるが如ごとく、或あるひは堅けんなるが如ごとく、或あるひは柔じゆうなるが如ごとく、或あるひは重じゆう

禪と修養

なるが如く、或は輕なるが如く、或は驚覺するが如きは、皆息調はざるなり、必ず之を調ふべし、調息の法は、暫く口を開張し、長息は則ち長に任せ、短息は則ち短に任せ、漸々に之を調へ稍々に之に隨ふ、覺觸來る時、自然に調適す、而して後に鼻息通するに任せて通すべき也……若し病有る時は、心を兩趺の上に安じて而して坐す、若し昏沈する時は心を髮際眉目に安ず、心若し散亂する時は、心を鼻端丹田に安じ、居常坐する時は、心を左掌の中に安ず、若し坐久しき時は必ず心を安せずと雖も、心自ら散亂せざる也。

と、身心を調ふること此の如し、かくて如何か工夫すべき道元禪師曰く、箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何か思量せん、曰く非思量。此れ乃ち坐禪の要術なり。

と、不思議底を思量す、これ宇宙平等不思議底の本體の上に萬象差別の思量を運ぶもの、思量を離れ不思議を離る、曰くこれ非思量。しかれども非思量の境地、豈にそれ容易ならんや、茲に於て、公案を用ふるまた不可し、瑩山禪師、示して曰く、

公案

心若し散亂する時は、心を鼻端丹田に安じ、出入の息を數ふ、猶ほ未だ休せざる時は、須く一則の公案を提撕舉覺すべし、謂ゆる是れ何物か恁麼來、狗子無佛性、雲門の須彌山、趙州の柏樹子等、沒滋味の談、其の所應なり、猶ほ未だ息まざる時は、一息截斷兩眼永く閉づるの端的に向て打坐工夫し、或は胞胎未生、不起一念已前に向て行履工夫せよ、二空忽ち生じて散心必ず歇まん。

と、以て坐法の大要とその用意のある所を知るべし、古人の「四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見る」の提示は、此の靜處の工夫打坐にして、「四條五條の橋の上往き來の人をそのまゝに見る」の活機用も、その根柢をこゝに得ざれば、一場の戲論たらんのみ。

二 禪と死生

生とは何ぞや、死とは何ぞや、生と死との關係如何は、是れ自家頭上喫緊の問題にして、幾多の宗教は此を中樞問題として起る、しかれど世人全く之を知らざるにあらざるも、真に之が意義を解決せんと努むるもの尠し、『寂室録』に曰く、

世間の人は生死あることを知ると雖も、生死を懼るゝもの鮮し、終日擾々役役として塵網に繋り、虚く歲月を度りて全く前程に大事あることを顧みず、忽爾として、臘月三十日到来する時は、則ち方に始めて驚窘惶惶して手脚を頓くに處なし、宛も生死あることを知らざる者と以て少しも異なることなし。

と、臘月三十日、是れ何人も一度は遭遇せざるべからざる問題にして、所謂

自家頭上の問題

元日や今年もあるぞ大晦日

なるもの、既に生あるもの何人か死なからん、たゞ壽夭あるのみ、長短あるのみ、しかも是亦五十歩百歩の差のみ、天地の悠久なるより之を見んか、一浮漚の出没に異ならずして、此間に僅に長短を論ずるのみ。

穆山老漢、曾て奥羽巡錫に際し、山路險惡、老體を古轎に托して行く、行くこと數丁にして遽然轎底脱し、將に泥中に墜落せんとして僅に免かる、老漢、破顔一笑、一首を詠じて曰く、

古轎の底のぬけると死ぬるとは

ところえらばず時をきはらず

死は實に朔日と望日と、春夏と秋冬とを擇ばざるなり、金殿玉樓と茅屋矮舎とを問はざるなり、香嚴示して曰く、

百計千方只爲身。不知身是塚中塵。

禪と死生

莫言白髮無言語一此是黃泉傳語人。

痛切ならざるにあらざるも、看來れば、なんぞたゞ白髪のみ黄泉傳語の人ならんや、垂髫黒髪も是れ黄泉傳語の人ならざるらんや、こゝに於て死生問題の解決は、多く無常觀を出發點とす、道元禪師示して曰く、

夫れ無常を觀する時は、吾我の心生せず、名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを願す、所以に精進は翹足に慣ふ、縦ひ緊那迦陵讚歎の音聲を聞くも、夕の風、耳を拂ふ也、縦ひ毛嬪西施美妙の容顏を見るも朝の露眼を遮る也、已に聲色の繫縛を離るれば、自ら道心の理致に合はん。また、無常を詠じて

世の中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやどる月影

はしふる露にやどる月影

と警醒し、白隠は「死」の一字を拈じて

若し人見徹するを得ば、眞の大丈夫と名く

と、眞個に無常を觀する時、痛切なる悔悟あり、反省あり、眞摯なる努力あり精進あり、深酷なる研究あり、實參あり、而してその實參や研究や、師に寛嚴あり、根に利鈍なき能はざるを以て、上士は一問一答の直下に生死の牢關を打破するものなきにあらざるも、中下の士に至りては、三年五歳、或は二三十年を要するあり、所謂、春風に高下無きも、花枝自ら短長あるを免れず。

修して到り、證して得る固より事容易にあらざるを以て、起居動靜の間に之を工夫し之を參究するを要す、殊に身親しく死生の巷に出入せんか、平生の工夫は、一段の精彩を放ち、三年五歳の枯坐に勝るものあり、穆山老漢、曾て壯時を回顧して曰く、

拙僧(穆山)が曾て牛込の宗參寺に居た時の話であるが、此の寺は徳川家の御

朱印付の寺であつて、其の頃慶喜公の御傍御用御取次役を勤めて居つた室賀甲斐守と云ふ旗下も檀家の一人であつた、幕末の大騒動の時榎本(子爵等)を大將株にした脱走組と云ふ團體があつたが、或る行きがりの爲め室賀がこの脱走組の奴原の襲撃を食つて自分の寺に逃げ込んで来た代々の重なる檀家ではあるし、假令其れでなく共命がけて駆け込んで来たものを追ひ遣るといふことは坊主の法でないから、本人の言ふが儘に兎に角も庇護つて遣つたのさ、脱走組の奴原に八釜しく言はれるのは覺悟の前として其れよりも困つたのは官軍に眼を付けられることであつた、何しろ慶喜公に事へて居つた十人の侍臣は朝敵と名指され、室賀はその十一人中の一人であるから官軍の詮索もなか／＼一ト通りでない、然かるに折善く薩摩の坊主で懇意にして居た者があつたから其の坊主に頼んで室賀を助けて呉れいと申込んで見た處、餘人ならイザ知らず十一人の一人である室賀をうか／＼助ける譯にゆかない

と云ふことであつた、しかし乍ら一旦口を切つて仕舞つてから、其の儘へ、垂れては第一室賀の一命に係る次第であるから、自分も官軍の人達に面會して懇々と事情を申述べ、室賀を官軍にすると云ふ條件でヤツト承諾を得た、其の時西郷隆盛にも一寸面會したのちや、其の時分の騒ぎと來たら何しろ大したものであつて、駒込に居つた薩摩の坊主共などは七分通りは還俗して鎗砲を取り三分通りは間諜に身をやつして官軍に従ふと云ふ有様であつた、其様斯様して居る中、果して例の脱走組が嗅ぎつけて押し寄せて來た、總勢百六十人許りで其の中の頭領株とも見る可き六人丈け寺に入つて來て残りは抜刀で以て嚴重に山内を取り圍んで仕舞つた、何れも血氣にはやる面々のみであるから一見實に凄じいものであつたよ、其れから其の六人の壯士何れも抜刀をして自分の居間に詰めかけ直ぐに室賀を引き渡せと怒氣を含んでの掛合であつた、寺内山内共この有様であるから飯炊爺や小僧は勿論のこと、長老

の輩に至る迄或は隙を狙つて表に飛び出すやら、或は戸惑ひし乍ら椽の下に
 駈け込むやら一時は上を下への大狼狽であつたが、暫時して寺内は自分と六
 人の抜刀壯士との差し向ひとなつて仕舞つたのちや、二言三言押し問答して
 見たが、相手は怒氣満々として血相をかへて居るから自分の話の耳に通ふ筈
 はなく、刀を逆手に疊をヂヤキ、とやりながら、脱走「室賀を何れに隠匿て
 あるかかれこれ言はずに一刻も早く引き渡せ」移山「檀家のことではあるし一
 時は庇護つて見たが間もなく逃がして遣つたから今は寺中に居らぬ」脱走「斷
 つて渡さぬとなら貴僧の生首を持つて歸る」移山「何と云はれるとも居らぬ者
 を渡す譯にはゆかない」壯士共はます／＼怒つて身をふるはし將さに一刀を
 自分の首にあびせかけんとする身構えをした。
 殺氣満山を壓し、劍光人を射り、老漢の頭、將に壯士の手裡に歸せんとす、此
 の刹那、老漢の活作略如何。

自分を除いて外は、寺中山内一人の味方とはなく、外は百數十名の血氣の
 はやり雄に取圍まれ、眼前には六名の抜刀壯士が控へて居るのだから如何共
 法の付け様が無い去りとして官軍に迄事情を打ち明けて一旦庇護つて遣つた室
 賀を出す譯には無論行けないのちやから、事ここに至つては結局奴原の要求
 通りに生首を渡すの外途がつかなくなつたが……此期に及んでも矢張り未
 練の有るものと見え、好い折があつたら逃げ出さうかと云ふ了見も最初にあ
 つた、無事な時は大きな言を吐き散らしてもイザとなると意氣地が無いもの
 だよ、併しいくら未練があつた處で、またいくら意氣地が無かつた處で、此
 の場に立ち迫つた以上は矢張り死を覺悟する外どうしても他の途が無い、其
 れからフイと坐を立つと、襟元をつかんで引き戻し乍ら脱走「何處へ行く」
 移山「何處へも行ないが僧侶は此なざまでは死なれない装束する間一寸待つて
 呉れ」と云つて別室に於て法衣を着袈裟をかけて元の席へ復つた、之れでよ

あしいと云ふ一言自分の口から出さへすれば自分の生首がコロリと前に落ちる許りになつた時ヒョツと臺所にあつた酒に眼が着いた 移山「時に諸君、自分一杯飲んで死にたいと思ふが承知して呉れまいか」脱走「よろしい」其れから臺所から貧乏徳利を提げて来て大きい茶飲茶碗で以て冷酒をチビリくんと飲み始めたが、八九杯も遣ると大分氣持が快くなつて来たから脱走奴原に向つて移山「どうだ諸君も一杯遣らんか」脱走「左様一杯遣らんか」斯の一刹那に於ける自分の心機の動作はぶつ續けざまに坐禪の三年も遣つたよりかも餘程以上の効力があつた自分の一生を假りに其の事件迄とすれば自分が生涯坐禪で鍛え學問で修めた決斷と智慧とは斯の刹那に現れて来たので奴原の口から「一杯やらうか」の一言を聞いた時は占めたと思つた、併しこの間の妙機は自分の心に映るの外分り好い様に他人に説き明が出来ないよ、其れから暫時が間献酬を遣つた處双方共大分上機嫌になつて来た移山「死ぬのは何時でも出来

るから湯豆腐でもしてゆつくり飲み直さうぢやないか」脱走「よからう」移山「其れにした處が表はあの通り、内はこの通りでは豆腐を買はせうにも使が無いではないか、一旦斯様なつた上は拙僧は逃げも隠れもしないそんなことに氣を措かずに表の連中をひと先づ還してはどうだ」六人の壯士が其れを承知して直ぐに外に出て何か云つたと思つたら百數十人の拔刀連が一人残らず解散して仕舞つた、奴原の亂暴と來たら實に言語道斷であつたが、扱其の命令の行はれたのも亦えらかつたものだ。

若しそれ凡漢ならんか、氣迷ひ眼眩み、手忙脚亂一場の醜態を演せんも、渠は齡壯なるも、一靜百動を制するの餘裕を存せり、果然、危地を跳出し來る。話は一寸前後になつたが死なねばならない境界に定まると云ふと、度胸が其の方に定つて仕舞ふから死にたくないなど、云ふ考へは無くなるものだ、戰場で戦死するは苦しいことは苦しいに相違あるまいが度胸を据ゑることの出

來る軍人であつたならば他で思ふ程苦痛に感ずるものでなからうと思はれる其話は其れとして自分も一旦死ぬと度胸を定めたが酒の一件からして敵手の容子に變化が出来て来て、奴原が杯を手にした時はヤ一自分の命が助かつたと思つて仕舞た其れから小僧共を呼び集めて、湯豆腐を拵えさせたり、酒の爛をつけたりしてゆつくり飲んだり、飲ませたりした處今迄張り詰め切つた奴原の氣に追々緩みの來た容子が見えたから移山「どうだえ愚僧の言ふことを一と通り聞いて呉れんかえ」脱走「イヤお話があるなら聞いてもよろしい」其れから室賀甲斐守を庇護つて遣つた一什一伍を堂々と説明した上移山「諸君が斯様して一命を投げ出して遣つて居られるのは畢竟徳川家の再興を圖ると云ふ目的の爲めであらう、其れ故其の目的と關係あることならば大小に係はらず手をつけられるのは至當であるが、愚僧の生首一つと徳川家の興廢とは果して何んな關係あるであらうか、況んやこれで以て死ぬものとするれば愚僧

に取つては實に名分も何んにもない云はゞ行き倒れ同様の犬死に過ぎないから、其の犬死した坊主の生首を搔つ深つて行つた處で諸君の爲めにも別に何等の利益のないことではないか」斯く説破した處「脱走」成る程」と屈伏して生首問題はヤツトのことで無事に済んだが、然らば此の寺を吾々同志の屯所にして呉れいと延つ引きならない申入れを受けた、斯様段々と打解けて見れば脱走組の心事をも想ひ遣られて如何にも氣の毒に感じたから、一ト通り時勢の變遷を説明した上移山「扱斯くなる上は諸君の力で以て徳川家の再興を望むは迎も出來んことである今山も川も無いこの寺に立て籠つて官軍を引き受けるとして其れが一日も保たれるものでない、然かるに一旦脱走組の屯所と名が付くと云ふと、幸に焼き棄てられないにした處が廢寺は屹度申し渡されるに定つて居る、此時に臨んでは一ヶ寺なりとも御縁故のある御朱印付の寺を残して徳川家歴代の御回向申すこそ諸君の忠節の志と云ふであらうに一時

の怒りに前後を忘れて淺墓な企てを爲すは徳川家に對して却て不忠の振舞ではないか」と諭すと流石に猛り切つた脱走連も其れから其れと理に責められ徹宵痛飲して辭し去つたが、去るに臨んで二た張りの提灯を貸して遣つた處門番で以て滅茶々に打ツ毀はし乍ら脱走、此寺の和尚は圖太い坊主だ、どんなことをするか油斷がならない」と云ひ合つたさうだ、度胸が定つて來ると心が落ち付く、心が落ち付くと先が明るくなつて來る、先が明るくなつて來ると決斷が付くと云ふ順序になるから、坐禪で以て心を整へる鍛練と修養とを積むことが總べての根本となるのである、何卒若い人達も、一番ウント坐禪をやつて充分心を落附けて、國家の爲めに盡して貰ひたいものである、夜睡られない〜と云つて困つて居る人達が多いやうぢやが其れはツマリ決斷力が乏しい爲め思ひ切りが悪いからであらう、自分などは寢さへすれば何時でも眠られる眠ると決心さへすれば唐紙一重かけでがら〜騒がれても安眠

が出来、毎夜寝るのは死ぬ稽古であるから平生決斷力を鍛えて思切りを善くするのが大切ぢや。

四面皆敵、白刃頭上くたに下らんとするの一刹那、此の膽力あり、機智ある行動を爲す、豈に凡漢の模し得る所ならんや、是れ多年修養の結果ならずんばあらず、而してまた、穆山老漢は此の一事を以て三年枯座の閑工夫に勝れるの修養をなせりと云ふ、是れ實に偽らざるの告白なるべし、しかれども禪を以て單に氣を養ひ膽を練るの術とせんか、禪を去ること遠して遠し、養氣鍊膽の如き、可なることは可なるも、禪の根本義より見れば一種の副産物に外ならず、茲に於て更に進んで正念工夫その本源に溯らざるべからず、白隠禪師、病中の工夫を激勵して曰く、

古來賢達の人々の巖谷に身をよせ、深山に形を隠くし給ふ事は、世縁を遠ざけ、塵務を捨離して道行純一にはげみ勤めんが爲めなり、然るに病中を除

きて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず、病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ、使僧知客の應對も省き、廣衆雜話の喧嘩もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豊儉を見ず、死活は天運に投掛け、饑寒は看病の人に打任せて、只狗猫など惱伏したる體にて何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻、死も亦夢幻、天堂地獄、穢土淨刹、悉く抛擲下して、一念未興已前、萬機不到の處に向つて、是れ何の道理ぞと、時々點檢して、正念工夫相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打ち越え、悟迷の際を超出して、金剛不壞の正體を成就せんこと、其れ眞個不老不死の神仙ならずや、人界に出生したる思ひ出ならずや、圓顛方袍の威徳ならずや、佛道微妙の靈驗ならずや、眞正參禪の人の前には、吉凶榮辱、逆縁順縁、盡く道業を助くる糧となり、懈怠惰弱の人の前には、假初の塵事芥子許りの病氣も、夥しき障りに

仕なして、果は宿業のわざなり、般若に縁こそなければ種々の道理をつけ、遠からぬ般若を遠ざけ、根もなき業障を種々たて、一生を錯るほどの苦、苦しき情なきことはなきぞとよ、古來より重病を受けながら疑團打破の人々は間多き事なるぞかし。

また、天桂禪師示して曰く、
竊に四大本空を默想し、一心に道を念せよ、病縁に倚りて以て安逸を恣にする事勿れ……蓋し學道の人須く病を以て良薬と爲すべし、但、無常を念じて憂懼を生ずること勿れ、古徳の所謂、老僧自ら安閑、八苦交煎すれども總に妨げず、常に之を思つて以て自ら省みるべき也。

と、所謂「老僧」の面目如何、苦樂相干からざる安閑底の消息如何、此の面目に相見し、此の消息を識得する實に人生究竟の問題なり、之を解決し得て人生の意義初めて完し、故に道元禪師曰く、

古來の佛祖いひきたることあり、いはゆる、若人生百歳不_レ會_ニ諸佛機。未_レ若_ニ生一日而能決_ニ了之、これは一佛二佛のいふところにあらず、諸佛の道取しきたれるところ、諸佛の行取しきたれるところなり、百千萬劫の回生回死のなかに、行持ある一日は、髻中の明珠なり、回死回生の古鏡なり、よろこぶべき一日なり、行持力みづからよろこばるるなり、行持のちからいまだいたらず、佛祖の骨髓うけざるがときは、佛祖の身心をします、佛祖の面目をよるこばざるなり、佛祖の面目骨髓これ不去なり如去なり、如來なり不來なりといへどもかならず一日の行持に稟受するなり、しかあれば一日はおもかるべきなり、いたづらに百歳いけらんはうらむべき日月なり、かなしむべき形骸なり、たとひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、そのなか一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の佗生をも度取すべきなりこの一日の身命はたふとぶべき身命なり、たふとぶべき形骸なり、かるが

ゆるにいけらんこと一日ならんには諸佛の機を會せば、この一日を曠劫多生にもすぐれたりとするなり、このゆるにいまだ決了せざらんときは一日をいたづらにつかふことなかれ、この一日は、をしむべき重寶なり、尺璧の價値に擬すべからず、驪珠にかふることなかれ、古賢をしむこと身命よりもすぎたり、しづかにおもふべし、驪珠はもとめつべし尺璧はうることもあらん、一生百歳のうちの一日は、ひとたびうしなはん、ふたたびうるることなからんいづれの善巧方便ありてか、すぎにし一日を、ふたたびかへしえたる、紀事の書にしるさざるところなり、もしいたづらにすごさるは、日月を皮袋に包含して、もらさざるなり、しかあるを古聖先賢は、日月をしみ、光陰をしむこと、眼睛よりもをしむ、國土よりもをしむ、そのいたづらに蹉過するといふは、名利の浮世に混亂しゆくなり、いたづらに蹉過せずといふは、道にありながら道のためにするなり、すでに決了することをえたらん、また

一日をいたづらにせざるべし、ひとへに道のために行取し、道のために説取すべし、このゆるにしりぬ古來の佛祖いたづらに一日の功夫をつひやさざる儀、よのつねに觀想すべし、遲遲華日も、明窓に坐しておもふべし、蕭蕭雨夜も、白屋に坐してわするることなかれ、光陰なにとしてかわが功夫をぬすむ、一日をぬすむのみにあらず、多劫の功德をぬすむ、光陰とわれとなんの怨家ぞ、うらむべし、わが不修のしかあらしむるなるべし、われわれとしたしからず、われわれをうらむなり。

此の根本問題を識得せんか、その一日は、實に百千萬劫中に得難き一日にして、尺璧も驪珠も固より比すべきにあらず、こゝに至らんか、生死中にありて生死を超越す、故に生の厭ふべきも無く、死の惡むべきもなく、生や全機現也、死や全機現也、日々是れ好日也、故に「鼓山晩錄」に曰く、

人の生死あるは、猶ほ日の晝夜あり、歳の寒暑あるが如し、故に生も以て慶

生死と涅槃

と爲すに足らず、死も以て悲と爲すに足らず、重んずる所は生じて能く其の生を善くし、死して其の死を善くするにあり、則ち大智慧大力量を具する者にあらずんば能はじ。

と、また道元禪師、生死涅槃の關係を示して、曰く、

もし人生死のほかにほとけをもとむれば、なかえをきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみんとするがごとし、いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脱のみちをうしなへり、ただ生死すなはち涅槃とこころえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし、このときはじめて生死をはなる分あり、生より死にうつるところは、これあやまりなり、生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり、かるがゆるに佛法のなかには、生すなはち不生といふ、滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちありこれによりて滅すなはち不滅といふ、生といふときには生よ

りほかにものなく、滅といふときは滅のほかにもなし、かるがゆるるに生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ、この生死は、すなはち佛の御いのちなり、これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり、これにとどまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり、佛のありさまをとどむるなり、いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて佛のこゝろに入る。

無常觀より入りて、遂に常無常、生死去來を超越し、しかも、生に即し死に即して活潑無礙也、全體全用の左轉右轉也、十方の國土、何れの處か淨土ならざる、六道の輪廻、何れの時か風流ならざらんや。

かくの如きの風流、かくの如きの消息、固より日用光中一動一靜の上に現成するも、古來の古僧、眼光落地の時に於て、片言隻語、最も痛快に之を道破す、

今左にその二三を記せん、

道元禪師

五十四年。照第一天。打箇踣跳。觸破大千。

嘆

渾身無覺。活陷黃泉。

瑩山禪師

自耕自種閑田地。幾度賣來買去新。

無限靈苗繁茂處。法堂上見插鋤人。

祖元禪師

諸佛凡夫同是幻。若求實相眼中埃。

老僧舍利包天地。莫向空山撥冷灰。

來亦不前。去亦不後。百億毛頭獅子現。

禪と死生

百億毛頭獅子吼。

蘭溪道隆禪師

用翳睛術。三十餘年。打翻筋斗。地轉天旋。

明極楚俊禪師

七十五年。一條生鐵。大地粉碎。虛空迸裂。

夢窓國師

轉身一路。橫該豎抹。畢竟如何。彭八刺札。

寒巖義尹禪師

八十四年。動靜得禪。末期一句。威音以前。

徹通義价禪師

七顛八倒。九十一年。蘆夜覆雪。午夜月圓。

峩山紹碩禪師

合成皮肉。九十一年。夜來依舊。橫身黃泉。

隱元禪師

西來柳栗起雄風。幻出柴山不宰功。

今日身心俱放下。頓超法界一真空。

月舟宗胡禪師

出息入息。前步後步。生死去來。箭鋒相拄。

無中有路通。是我真歸處。

卍山道白禪師

超師超佛。滿八十年。秋風捲地。孤月遊天。

無幻幻兮無病病。全身入塔石中蓮。

德翁良高禪師

大地山河。一堆塵埃。今日消盡。分明沒跡。咄。

禪と死生

頑極官慶禪師

八十五年。之乎者也。咄。

澤庵禪師

夢

白隱禪師

大叫一聲を末期の句に代へ右脇にして化を他界に還す。

有言無言、粗言細語、第一義に歸す、若しそれ此間に格調を議し、巧拙を論ずることあらば、祖翁を去ること遠して遠矣。

三 禪と健康

禪は死生を超越す、生命の壽夭長短の如き深く關する所にあらざるが如きも四弘の願輪に乘じ、擊石火閃電光の中、順逆縱横の活機用を現するには、強健なる身心に待たざるべからず、故に道元禪師は「肉身を惜むにあらず法身を惜むなり」と云ひ正眼國師は衡を以て食量を定む、由來禪に健康法を説き長壽法を談ずるもの尠からざるは怪むに足らず、今之を述るに當り、先づ一般佛敎に於ける健康法を一瞥せんとす。

經論中、疾病若しくは健康法に關する事尠からざるも、廣く世に知らるゝは彼の「佛醫經」に於ける發病の十因なり。

- 一、久座。(久しく坐して、運動の不足なるを云ふ)
- 二、食不節。(飲食の上に於て、節制する所なきを云ふ)

- 三、多憂愁。(煩悶憂惱すること多きを云ふ)
 - 四、疲極。(身心を役すること多きに過ぐるを云ふ)
 - 五、淫洗。(淫慾を恣にするを云ふ)
 - 六、瞋恚。(短氣にして忿怒多きを云ふ)
 - 七、忍大便。(大用を催するも、強ひて長く制するを云ふ)
 - 八、忍小便。(小用を催するも、強ひて長く制するを云ふ)
 - 九、制上風。(咳、欠、嚏等を強ひて抑制するを云ふ)
 - 十、制下風。(屁を強ひて抑制するを云ふ)
- また『僧祇律』には、横死に九種の原因あるを説く。

横死の九因

- 一、知ニ非饒益食ニ而貪食。(不衛生の食物なることを知りつゝ、しかも貪り食ふを云ふ)
- 二、不ニ籌ニ量食。(衛生不衛生の食物共に分量を籌らざるを云ふ)

三、内未レ消更食。(前に食したるもの、未だ十分に消化せざるに、更に次の食事を爲すを云ふ)

四、食未レ消而摘吐。(自然に消化せざるに、咽喉より手を入れ無理に吐瀉するを云ふ)

六、飲食物不レ隨レ病。(飲食物はその人の體質疾病によりて選擇せざるべからず、然るに之を爲さず、意に任せて飲食するを云ふ)

七、隨レ病食不ニ籌量。(身に疾病あれば必ず飲食の量に注意せざるべからず、然るに之を爲さず、平日の如く飲食するを云ふ)

八、懈怠懶ニ服藥。(病あるも、服藥に怠るを云ふ)

九、無ニ智慧ニ不能調レ之。(己れ愚にして避くべき災難も之を避くことを爲さず、又治すべき病も之を治すること能はざるを云ふ)

に、經論に説く所多々あるも、之を清潔、運動、節制の三に攝することを得べし。

身體清潔の法として、先づ擧ぐべきは澡浴なり（澡浴は行水、入浴の意）、此に就て『毗尼母論』に五種の利益を説く、

澡浴の利益

- 一、除垢。
 - 二、治皮膚令一色。
 - 三、破寒熱。
 - 四、下風氣。
 - 五、少病痛。
- また、『溫室洗浴衆僧經』には、七病を除き七福を得べきを説く、所謂、七病を除くとは、
- 一、四大安穩。（四大とは地水火風にして、今は肉體を意味す）

- 二、除風。
 - 三、除濕痺。
 - 四、除寒氷。
 - 五、除熱氣。
 - 六、除垢穢。
 - 七、身體輕便眼目清淨。
- 所謂、七福とは、
- 一、四大無病所生常安。
 - 二、所生清淨面首端嚴。
 - 三、身體常香衣服淨潔。
 - 四、肌體濡澤威光徳大。
 - 五、饒人從拂拭塵垢。

六、口齒香好所說肅用。

七、所生之處自然衣服。

更に澡浴の具を擧げて曰く、

一、燃火。

二、淨水。

三、澡豆。

四、蘇膏。

五、淳灰。

六、楊枝。

七、內衣。

と云ふ。

口中の清潔法としては、食後口を漱ぎ、楊枝を使用すべきことを説く、

佛曰く、有染の苾芻を禮すべからず(有染の苾芻とは不潔の僧の意)、有染の苾芻も亦た他を禮すべからず、違するものは越法罪を得、優波利、佛に白して云く、何をか有染と名く、佛の曰く、染に二種あり、一には不淨染、二には飲食染、且く、飲食染とは、若し食噉して未だ口を嗽がす、設ひ嗽刷するも尚ほ餘の津膩あれば、是を有染と名く、若し才に禮すれば僭を招く故に、食後の事は、須く口齒を嗽刷すべし。

華嚴經には、楊枝を執るの一些事を以て利他心を勸奨して曰く、手に楊枝を執らば、當に衆生の心に正法を得て、自然に清淨ならんことを願ふべし。

楊枝、或は齒木と云ふ、毗奈那律に楊枝を嚼むの五利を擧げて曰く、

一、口不苦。

二、口不臭。

三、除風。

四、除熱。

五、除痰癢。

華嚴經には、また之を利他心に及ぼして曰く、

晨に楊枝を嚼まば、當に衆生の諸の煩惱を調伏牙噬することを得べきを願ふべし。

澡浴を爲し、食後に口を嗽ぎ、楊枝を使用するが如き、今日より見れば、平凡なる一些事なりと雖も、佛教が既に二千數百年前に於て之を勸奨し、且つ之を利他心修養の上に及ぼしたるが如きは、多少注意に値ひせずと云ふべからず。

かくの如く、自身を清潔にするのみならず、その住所をも清潔にせざるべからず。

掃地の利益

釋尊の逝多林にあるや、その地の不淨なるを見て、自ら箒を執りて掃はんとす、佛弟子等、之を見て箒を執りて之を掃ふ、その時に、釋尊、掃地に五種の利益あることを示して曰く、

一、自心清淨。

二、令他心清淨。

三、諸天歡喜。

四、植端正業。

五、命終當生天上。

寺院—殊に禪院は、塵寰に遠り、境地靜閑淨潔、人をして、足一度その地に入れば、別に天地の人間にあらざるの感を起さしむるもの、その由りて來る所、遠しと云ふべし。

次に運動に就て、一瞥せんか。

禪と健康

「十誦律」に經行に就て五種の利益を擧ぐ、所謂、經行とは、印度の地たる濕氣多く、博を疊んで道と爲し、中に於て往來すること布の經の如くなるより起る、行道、若しくは運動の意なり、故に義淨三藏は「經行は乃ち是れ鎖散の義、意は養身療病にあり」と云へり。

經行の利

- 一、勦健。(行動の敏捷輕快なるを云ふ)
 - 二、有力。(強健なるを云ふ)
 - 三、不病。
 - 四、消食。(食物の能く消化するを云ふ)
 - 五、意堅固。(意志を強固にするを云ふ)
- 最後に「節制」なり、節制の義たるや、包容する所頗る廣きも、健康上最も留意すべきは、姪慾と食慾にあり。
- 「十二頭陀經」には、若し多食せんか、一には修行を妨げ、二には腹脹り胸塞

りて苦むを以て、三分の二を以て常食せよと説き、「增一阿含經」には、若し飽食せんか百脉調はず、心をして雍塞せしめ、坐臥安すからず、若し少食に過ぎんか、身羸へ心懸かに意慮固きことなしと説き、左の偈を以て、飽食少食の兩極端を誡め、中庸ならんことを示す、所謂「腹八合」の謂ひなり。

多食致三苦患。少食氣力衰。

處中而食者。如三秤無二高下。

また或經には、多食に就て五種の苦痛を擧ぐ、曰く、

- 一、大便の數多し。
- 二、小便の數多し。
- 三、睡眠多し。
- 四、身重くして業を爲すに堪へず。
- 五、食後自ら消化せざるを患ふ。

これ等は世人の多く經驗する所なるべし、進んで禪家に就て見んに「赴粥飯法」なるものありて、喫飯の威儀頗る嚴肅なり、殊に食時に當りては左の五種の觀念を以てすべきを説く。

食事の道
徳的意義

- 一、計功多少ニ量ニ彼來處一。(調食に至る迄の幾多の手数を考量し、またそ由て來る處の正邪を熟考するなり)
- 二、忖ニ己徳行全缺ニ應レ供。(自己の徳行が他より供養せらるべき價值ありや否やを反省熟慮するなり)
- 三、防レ心離レ過食等爲レ宗。(自己の嗜好により食物に對し、或は貪り或は曠り、或は痴を起することなきを保せざれば、努めて此等の過なからんことを期するなり)
- 四、正事ニ良藥ニ爲レ療ニ形枯。(食物は吾人に對する良藥なり、宜しく此の良藥を以て肉體の枯折するなからんことを努むべし)

五、爲ニ成道ニ故今受ニ此食一。(吾人の食物を要するは、飽かんが爲めにあらす、道行を完成せんが爲めの手段たるを忘るべからず)

是れ痛切なる食卓道徳とも云ふべし、若しこれ此の觀念を以て食に對せんか鉢裡の飯、桶裡の水、自利利他の莊嚴となる、更に進んで禪的眼光を以てせんか興趣の更に深きものあり、今一二の話を擧げんか。
金牛和尚は馬大師下の善知識なり、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して曰く、菩薩子喫飯來。
是れ狂か痴か、將た讚か貶か、工夫一番し來るを要す。僧あり雲門大師に問ふ、如何なるか是れ塵々三昧、雲門答へて曰く、鉢裡飯桶裏水。
鉢裡飯、桶裏水、恁麼にして塵々三昧なるや。
無着尊者、五臺山に在りて典座となる(典座は禪宗に於て、文殊、彌鍋上に現す無着遂に打して云く、釋迦老子來るも我亦た打せん。

文殊菩薩、粥鍋上に現す、何等の狡見ぞ、此の惡戲を爲す、無着の一撃、太だ痛絶快絶なりと云ふべし。

維摩居士、須菩提に告げて曰く、若し能く食に於て等なる者は諸法も亦た等なり、諸法等なる者は食に於ても亦た等なりと、是れ直に食に即して道、道に即して食、道食不二の妙味を提示せるものと云ふべし、唯此等の話頭、曲、頗る高く俗耳に解し難し、今、調心調息の強健法として白隠禪師の婆説を掲げん、渠は齡古稀を論へて太だ強健なりき、自ら曰く、

白隠の強健法

馬年今歳、古稀を越えたりと雖も、半點の病患もなく、齒牙全く搖落せず、眼耳次第に分明にして、動もすれば鬢鬚を忘る、毎月兩度の法施會、終に怠倦せず、請に他方に應じて、三百五百の海象を聚會して、或は五旬七旬を經に録に、雲水の所望に隨つて亂説亂道する者、大凡そ五六十會に及ぶと雖も終に一日も罷講齋を鎖さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時よりは遙かに勝れり

と云ひ、而して其の形を鍊るの要を説て曰く、大凡そ生を養ひ長壽を保つのは、形を鍊るにしかず、形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らしむるにあり、神凝る時は氣聚る、氣聚る時は眞丹成る、丹成る則は形固し、形固き則は神全し、神全き則は壽がし、是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり、須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を、千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るのみ

更にその効果の偉大なるを述べて曰く、纔かに三年に充たざるに従前の衆病、藥餌を用ひず、鍼灸を假らず、任運に除遣す、特り病を治するのみにあらず、従前手脚を抜むことを得ず齒牙を下すことを得ざる底の難信難透、難解難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して、大歡喜を得るもの大凡そ六七回、其餘の小悟怡悅踏舞

を忘れしもの數を知らず、妙喜の所謂「大悟十八度、小悟數を知らず」と、初めて知る寔に我を欺かざる事を、古へ二三桶の襪を着くといへども是心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日と云へども襪せず爐せず、馬齒既に古稀を越えたりといへども、指すべき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘勳ならむか、

渠は氣力の旺盛なるを述べて曰く、

元氣自然に丹田の間に充實して臍下瓠然たること未だ篠打せざる鞠の如し若し人養ひ得て斯くの如くなる時は終日坐して曾て飽かず、終日誦して曾て倦まず、終日書して曾て困せず、終日説いて曾て屈せず、たとひ日に萬言を行すと雖も終に怠惰の色なく、心量次第に寛大にして氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、嚴霜素雪の冬の日も襪せず爐せず、世壽百歳を閱すといへども齒牙轉た堅固なり、怠らざれば長壽を得若し夫れ果し

てかくの如くならば何れの道か成らざる、何れの戒か保たざる、何れの定か修せざる、何れの徳か充たざらむ、若し又如上の故實に達せず、眞修の秘訣を諳んせず、妄に自ら悟解了知を求めて、觀理度に過ぎ思念の節を失する時は胸隔痞塞し、胸火高ふり上りて兩脚氷雪の座に浸るが如く、雙耳溪聲の間を行くに齊うして、肺金痛み碎け、水分枯渴して終に難治の重症を發して命根も亦保ち難きに至る、これたゞ眞修の正路を知らざるが故なり、寔に悲むべし

これ白隱の稱して白幽仙人より傳授し來れるものなりと云ふ、白幽仙人の存否は且く措くも、少くとも渠が多年實驗上より得來れるもの、禪的健康法として、吾人はその價値を認めざるを得ず。

禪僧由來高齡強健の人に富む、今は一々列擧すると能はざるも、近時禪林の巨人として、世の景仰したる、森田悟由、西有穆山の兩師の如き、一は八十二歳

を以て逝き、他は九十歳を以て化を他界に遷せり、その健康法に關する實驗談の如き、吾人を啓發する所尠からず、左に掲ぐる所は、穆山老漢と某新聞記者との對談なり。(此の對談は當時穆山老漢八十餘歳の時)

▲老僧は朝はお粥、晝は通例の食事、夕飯には蕎麥湯など通例で、十三の時に剃髮して以來、肉類、卵などは少しも食べない、他家に行つても夕の馳走を受けるのは一番困るよ晩に大食すると何うもよくない、在家の人は夕飯を食べてまた夜食なんどいつて食べる人もある様だがよう食べられると思ふ様だよ、出家は一體常の人とはやる事も違つて居るが、私の經驗によると食物を餘計に食ふと何うしても身體も精神も爽かと云ふ譯にはいかないねえ、老僧はひさごの様な齒がまだ一本でも損じて居ない耳も目も聰明である記憶も言葉も極く明快で、動作も堅實なものである、殊に不思議な顔、手足等血色の鮮やかに光澤のある事だ、師の養生法はなほ數々ある。

▲氣を遣はんで宜い事に氣を遣つたり、思つても詮のない事を思ふから可憐心を無益に疲からして、事業が出来ないが苦勞が堪へない餘計に身體や心を遣ふと自然多く食ふ必要があるかも知れないよ、勉むべき事を勉め、思ふべき事を思ひ考ふ可き事を考へて居さへすればソウ大食する必要はない。私の養生法と云つた所で他にはない、今云うて居る様に、心に始終餘裕を有つ事は第一養生の秘訣だよ。

▲ナニ……養生談を聞きたいとな、其れはいろ／＼有らう、長命したからつて格別なことが無いから死んでも生きても何方でも構はぬが、其れは二つ共身勝手に出来ないものだ其處で七十歳を越してから以後は一つ試めに生きて見ようと思ふ考へが起き、從て衣服飲食その他衛生上の心掛けは人間の長命とどの位な關係が有らうかと思つて様々と氣を附けて見た、スルと此れが善い彼れは惡いと云ふ經驗も追々と出來て來たから、一時は書物にでも書

き附けて在家の人達にも教へて遣らうかと心掛けたこともあつたが、教へて遣つても守つて貰はぬと何にもならず、其れに衛生とか養生とか名の附いた書物も有り餘る程澤山出て來た様であるし、其れなり何時とはなしに記憶から外れて仕舞つたから順序の立つた話なんかは出來ないぞと仰せられて、自分分は食物に對しては昔から一つの願を起して居る其れは：此の食べ物は不味いと叱言を言はないこと、これ／＼を食へたいと頼まないことで、何んでも先方で食べさせて呉れる物を安んじて食へると斯う云ふ願である、見られる如くこの通り若い雲水共が居るが、三度の食物は代り番こに此等の手で思ひ思ひに料理されるから器用な奴の番に當つた時は旨く出來不器用な奴の番に當つた時は不味く出來るのだ、不器用の奴は矢張り不器用なもので、今日の汁は甘いぢや無いかと注意すると、次の日の汁は丸で醬油の様に鹽辛くすると云ふやうな譯になるから鹽辛いと思たら湯を加え、甘つたるいと思つた

ら醬油をさして食べるが一番だ、其れから假りにこんな料理をして呉いと云つて豫め依頼して置くとして、定めし自分の心に思つて居るやうなこんな鹽梅の風味に出來て來るであらうと物かに待ち兼ねの處へいよ／＼膳に上つて來て、箸を下して見て全く豫期に違ひでもして見ろ、其の時の失望は大體ではあるまいではないか、夫れであるから旨いなり不味いなり叱言を言はず頼みもせず何でも膳に上つて在るのを食べるが安心だよ、不器用で料理の下手な雲水を衛生局と附けて置く、なせなら、旨いとわれ知らず幾分か食べ過ぎをし、不味いとどうしても不足に食べる食べ不足の方は食べ過ぎたよりも身體に善いから其處でさう云ふ名前を附けたんだ。

▲年が年中朝は未明に起るが眼が醒めると先づ蒲團の上に坐はつた儘頭の上から足の先迄全身の一切を丁寧に両手で以て摩擦して其れから床を離れるのだ此全身摩擦法は七十歳の時から始めて無論自分で遣つて居つたが年取り

過ぎて身軀が弱つてゐるのに無理をしてはならぬと思つて今は小僧共に擦つて貰つて居る、洗面後は必ず七八町位づゝ山内を散歩し、朝一時間、晝一時間、晩卅分との三回は坊主の行として看經をするのちや、昔修業盛りの時代は寝る時間は今の時計で四時間と畧極めて置いたものであつたが、此の節は遅くて、九時大概是八時になると床に入るのだ平生の養生として行つて居ることは矢鱈に湯水を呑まないことで生水などは殆んど呑まんと云うてもよろしからう、茶は一同に一碗位しか用ゐない、次は間食を謹むことで、どんなに腹の減つた時でも、又たどんなに好きな物が其處にあつた時でも三度の食事外の時には決して食べもしない手も出はしない、其れから今一つは晝寝をしない事だ、晝寝をして好いか悪いかそんな理由は別として自分は晝寝をしたことは無い。

▲衣服は絹布にしようと思ふと木綿にしようと思ふことは人々の勝手次第であらうが、寒む過ぎぬ様暑つ過ぎぬ様、時々の氣候と自分の身軀とに能く調和の

取れるやうに着用するが何より肝腎の心掛けと云ふものぢや、今現在着て居た丈で寒いと感じたならば直ぐと立つて綿入なり袷なりを變ねることにし若し又た朝着た儘で日中に暑くなつたら時を過ぎずに脱ぐと云ふ風にさへ勉めれば決して感冒などに罹るものでない、これは自分が雲水の時代から實際したことであるから聊かも間違つては居らぬぞ、北海道は時節に依つては随分氣候も激變する處であつて、朝は綿入袷ねでも寒い程であるかと思ふと、晝頃になると袷でも暑いと云ふ風なこともある、自分は其の氣候の變化の激しい北海道に三回も行つて、雪の降る頃迄此地此地と廻つて居つたが一度も感冒を引いたことがない、其はつまり前話した如くに寒い暑いと感じに依り日に幾度でも衣服を重ねたり脱いだりしたからである、然るに一所に行つた隨行者共は四人が四人皆んな感冒に遣られてグウ／＼言つて居つた、若い

坊主共の中には寒中に素縮入や袷一枚位ひつけてブル／＼胴振ひして居る奴等も見受けるが其れは不精から來るので修養でもなければ鍛練でもない、一寸立つて着替えをすれば何の事もないのに、其の一寸立つのがいやさにづるづる遣つて居るのだ、總じてこの寒暑に注意し不精をせずに衣服の着脱さへ怠らぬと尠く共風邪に襲はれる憂ひはないと信じて居る、獨りこの事に限らず不精は凡ての衛生の大敵と見て置くがよろしいぞ。

悟由老漢、曾て著者に親しく告げて曰く、

今日は衛生の事が段々進み、體育の法も發達して、各學校とも體操運動などを行ふことだから、昔とは違ふて病氣と云ふことが自然少ないであらう、しかし山僧が今日のやうに衛生とか體育とか云ふことに餘り氣を注げない時代に生れて、今日まで壯健で長命をしたのは、聊かその原因とも云ふべきことがあるやうに思ふ。

山僧の受業師は、なか／＼體格のよい方であつたが、その食事は割合に少く大衆と共に飯臺に就かれた時は、應量器に一杯で仕舞ひ、決して再進(二杯)を受けられず、又寮内にて頭鉢で行粥の時は二杯きりで三杯とはかへられなかつた、七歳の時から十四歳迄かやうな人の許に育てられ、受業師が遷化の後には雲水行脚の身となつたが、間も無く奕堂和尚の許に行つて前後十八年隨身した、奕堂和尚は身長も高く、膂力も強く作務の時は普通の雲水二人分丈は確に出來たのであつた、それでも食事は至つて少量で、飯臺の時は應量器で再進をせられず、寮内では頭鉢で二杯きりであつた、山僧も受業師の許を離れた當分は、動もすれば少しく珍味があれば必ず分量を過すことがあつて、それが爲めに腸胃を損することがあつて居たが、奕堂和尚の少食でしかも大力で能く働かれるとことを見ると、少食でも身體を損することはないものであると云ふことを合點したから、その後はつとめて食事に注意

をした、かやうに受業師も隨身をした師家も共に少食であつてしかも壯健であるところを見て、自然に自分が習うて食事に注意して度を過ぎぬやうに致したから、今日迄餘り身體を損することなしにやつて來たのであらうと思ふ。一體、口は禍の門と古より云ふが、これは言語の上ばかりでは無い、食事の上に就ても能く氣を注げねばならぬ、今日の醫師の説を聴いても衛生とか攝生とかと云ふ中で、其重なるものは食事であつて大抵の病氣は食事から起るのであるから、衛生と云ふに就て尤も大切なのは食事である、この食事の分量さへ氣をつけてその分に應じて過ぎぬやうにしてゆけば、大抵の病氣は起らぬ、ツマリ何事も十分は溢れると云うてよろしくないが、とりわけ食事は十分にすべきでない、どんな甘い物でも十分に食ふのはよろしくないから、常に八分だけにして二分は残して居るのが宜しい、これは鳥獸でも長壽するものは皆さうであるといふから、人間もその理に違はぬものと思つて

居る、學問をしようが、事業をしようが、一朝一夕に出来るものではない、長い年月がかかるものであるが、途中で病氣になるやうであつては、たと當人の不幸ばかりでは無い、折角の善い志も世間の爲めにならんでしまうことになつては、誠に残念なことである、何卒、朝夕氣を注げて貰ひたいものである。

兩老の談する所、事に洵に平凡なるが如きも、八十餘年間實踐躬行し來りし所のもの、禪的健康法に志すもの、此の俗談平話の中より、健康法の眞諦を觀取せんか、一生受用不盡なるものあらん。

四 禪と武士道

玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試み、我國國民精神は日露戰役によりて初めて世界的に試みられたり、曾て我國が露國と相戰ひて戰勝の名譽を博するや、世界の論壇を聳動し、内外の識者は競うてその原因の探求に努めたり、中にはシーマン博士の「菜食と軍醫制度の整頓」とを以て原因となすが如き、吾人をして稍滑稽の感を起さしむるものなきにあらざりしも、ベルツ博士の「東洋文明の粹は佛教にあり、佛教の特色は内觀にあり、佛教はその根本主義として、精神の靜止を保たしむ、日本兵士の戰陣に臨みて、泰然自若たる亦大にこの佛教の内觀的效果に負ふ所多し」と云ひ、また「日本には死を輕視する一種の精神あり、是れ戰陣に臨みてその將士の勇敢なる所以なり」と論せしが如きは、頗るその肯綮に中れるものと云はざ

るべからず、而してベルツ博士の所謂「精神の靜止を保たしむ」とは「禪的修養」と云ふべく「死を輕視する一種の精神」とは是れ武士道の謂ひにあらずや、されば、禪と武士道とは、日本の誇りにして、兩者の交渉關係は、實に重要な問題と云はざるべからず。

蓋し、溯りて武士道の萌芽を討ぬれば、之を彼の祝詞の中に見ることを得べし、「皇大御神の見霽かします、四方の國は天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲のおり坐向伏す限り、青海原は棹舵干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海に舟滿ちつゞけて、陸より往くものは荷の絡縛ひかためて磐根木根履みさぐみて馬の爪の至りとどまる限り、長道間なく立ち續けて、狭き國は廣く峻しき國は平げく、遠き國は八十綱打懸けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さし奉らば荷前は、皇大神の大前に、横山の如く、打積み置きて、残りをば平らけく聞こし召さん」とは、古代に於て伊勢の大廟

に捧げられたる祝詞にして、勇邁、豪毅、尙武の意氣、躍如として現はる、是れ實に古代より我國民血液の重なる部分にして、やがてまた武士道の萌芽なりと云はざるべからず、而して此の血液の進る所、大化の革新となり、清磨の精忠となり、菅公の和魂漢才となり、更に彼の大宮人の花に戯れ月に啣ち、淫猥、奢侈、怯懦、安逸の風、満都を壓するや、從來、地方に散在して、質實簡樸、弓矢の道に心を用ひ、強盜を制し、郷曲を鎮衛したる族黨は、ますくその實力を鍛鍊し、その黨與を糾合し、隠然として一敵國の觀をなす武士の物興となり、平正盛、忠盛、源頼義、義家、義光等輩出するに及びては、藤原氏も彼等の鎧袖に庇護せらるゝにあらすんば政を布くこと能はざるの狀態となり、清盛出るに及んで大勢は急轉直下して、政權は擧げて平氏の手に移し、一轉して源頼朝の手に移るや、こゝに系統的組織的なる鎌倉幕府の創立を見るに至りぬ。

鎌倉幕府の創立は我國の歴史に於ける大いなる出来事なり、卒然として之を見れば唯是れ平氏に對する源氏の勝利に過ぎざれども、地理的より云へば南人に對する北人の勝利にして、思想上より云へば、武斷的平民思想が文治的貴族思想に對するの勝利たりしなり、而して政權更に一轉して北條氏に歸するに及び、漸次に武士道の發達となり、殊に時頼、時宗時代に至りて、舊來の武士道はこゝに新たな要素を吸收して、その内容を豊富にせり。

蓋し舊來の武士道は忠勇、信義、廉耻を信仰箇條としたるも、その思想の中核としては、氏族的名譽心と軍律的徳義心に過ぎず。彼等は時に八幡大菩薩を念じ、天満大自在天神を信するも、深奥なる死生問題を解決せんがためにあらずして、武士の名譽、家門の光榮を祈りたるのみ、しかも時代の趨勢、人生最後の要求は簡短なる倫理のみにては長く満足すべからず。併せて死生問題をも解決せざるべからざるの機運に達したり、而して此の潮流の波頭に立ちたるは當

時の禪僧たりしなり。

禪の特色は直截簡明なるにあり、經論を講せず、咒文を誦せず、彌陀を説かず、往生を談せず、直指人心見性成佛は彼等の標幟にして、脚下是黄金地、娑婆即寂光淨土は彼等の立脚地なり、その教義の斯の如くなるが如く、その手段もまた奇警辛辣にして頗る武斷的なり、彼等の一棒一喝は、與奪自在、殺活自由、眞に痛快を極む、若しそれ淨土教を以て女性的なりとせば禪は是れ男性的、天台眞言を以て公卿的なりとせば禪は武士的なりと云はざるべからず、此の男性的武士的なる禪は、鎌倉武士の趣味に適し、遂にその信仰を支配するに至り、従來の武士道に於て缺陷したりし死生問題に向つて直截簡明なる解決を與へたり、今左に代表的人物を擧げて、その消息の一斑を知るの便に供せん。

時頼は日本の政治史を粧飾するに足る一大政治家なり、渠、曾て曹洞宗の開祖道元禪師の越前の山中に在りて化を振ふを聞くや、崇敬の情禁する能はず、

寶治元年七月、特使を永平寺に遣はし、自ら弟子の禮を執り切に關東の化導を懇請す、道元その請を容れて鎌倉に來るや、自邸に請し、菩薩戒を受け、必要を參究すること半歲餘、道元禪師の詩に曰く、

半年喫飯白衣舍、老樹梅花霜雪中、鶯鶯一聲轟霹靂、帝鄉春色小桃紅。

と、その化導の詳なることは今知るべからざるも、後に足利義滿の天龍寺義堂に對し、「萬一變あらば天下を棄んと欲す、當に永平長老の平氏に勸めたる如くすべし」と云へるより推測すれば、たゞに禪要を提示したるのみならず、大義名分を明にし、專横暴惡動もすれば皇室の尊嚴を瀆さんとする北條氏に對し、政權奉還を勸説したるにはあらざるか、惟ふに道元禪師の鎌倉下りは、曹洞禪を武門に宣傳するの第一着手にして、また北條氏をして皇室に對し奉る態度に尠からざる功績ありたるものゝ如し、光明天皇、禪師に對し國師號の宣下あるや、勅書の一節に「相門降貴、武夫鎖勇」とのたまふ、蓋し此の消息を

云へるものならんか、禪師の鎌倉にある短日月なりしを以て、時頼をして最後の關門を打開せしむるに至らざりしならんも、渠が、

春流高似岸。細草碧於苔。小院無人到。風來門自開。

と詠せるに徴すればその得る勢からざりしを知るべし、渠は後にまた道隆蘭溪を招きて建長寺の開山となして此に師事し、更に元庵普寧に師事し、その「青靑たる翠竹、盡く是れ眞如、鬱々たる黄葉般若にあらざるなし」と示さるゝや言下に契悟し、「弟子二十一年、旦暮にこれを望む今一時に已に満足す」と云ひて一生の大事を了し、遂に

業鏡高懸 三十七年 一槌打破 大道坦然

の辭世に長にその面影を留む。

渠が生涯は多くの波瀾なきも、身を守るに枯淡寡慾、民に臨むに、仁愛を以てしたるは、政治家の標本的人物として崇敬するに足ると云ふべし。

時頼逝て十餘年にして空前の狂瀾怒濤は我島帝國に襲來せり、是れ所謂元寇にして實に我國に取りては、一大國難なりき、而して此の大難に處し、果敢、勇猛、遂に我國を泰山の安きに置きたるは、その子時宗なり、その功や偉なりと云はざるべからず。

時宗、年少にして父の職を襲ぐ、その責や實に重大なり、されば渠は心を修養に専らにし、樹にその根あり、水にその源あり、是を以て宋朝の名匠を請じて此道を助行せんと欲す」と特に詮藏主英典座の二僧を宋に遣はして、祖元を招きて參禪問法す、祖元固より尋常の禪者にあらず、全機電卷き大用天旋るの活手段あり、加ふるに宋末の戰塵中に在りて「乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風」と一喝し、僅に身を元兵包围の中より免れ得たるの傑僧、その提撕の辛辣なる想察するに餘りあり、今試みにその一二を記せんか。

時宗問て曰く、人生の憂苦、怯弱を以て最となす、如何して之を脱せん。

祖元曰く、之を脱すること甚だ易し、正に怯弱の來處を閉づべし。

時宗曰く、怯弱何れより來る。

祖元曰く、時宗より來る。

時宗之を解せず、反問して曰く、時宗怯弱を忌むこと甚だし、曷ぞ時宗より來ると謂はん。

祖元曰く、試みに明日より時宗を棄却し來れ果して膽坤維の如けん。

時宗曰く、如何にして時宗を棄却せん。

祖元曰く、一切の念處を絶せよ。

時宗曰く、その方便如何。

祖元曰く、只管打座して身心の靜寂を期すべし。

時宗曰く、俗家事務を免れず、光陰の乏しきを奈何せん。

祖元曰く、行住座臥一切の事務、是れ最良の學場なり。
と、乃ち左の用心を示す。

一、外界の庶事務に心意を奪はるゝ事勿れ。

二、外界の庶事物に貪着すること勿れ。

三、念を止んとすこと勿れ、念を止めずある勿れ、只一念不生をつとむべし。

四、心量を擴大にすべし。

五、勇勢を保持すべし。

また或時、

祖元問て曰く、一撃所知を忘す、更に修治を假らず、試みに一轉語を下せ。

時宗曰く、紅爐上一點の雪。

祖元曰く、動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せずと作麼生。

時宗曰く、一字公門に入れば九牛牽けども出でず。

祖元曰く、太守語は好了なり、請ふ紅爐上一點の雪を解説せよ。

時宗便ち拳を豎つ、

禪師、通譯者を打つこと一下して曰く、錯て名言を下す。

時宗、便ち禮拜す。

その蒙古の大敵來襲し、人心恟々たるの時、時宗、武裝して祖元に見へて曰はく、大事到來せりと、祖元曰く、如何か向前せん、時宗身を躍らして大喝一聲す、祖元曰く、眞の獅子見なり能く哮吼す、驀直に進前して回顧することなかれと、此の一小話、以て渠が修養の深きを見るべく、またその安心立命の立脚地を推知するに足る、而して、渠は弘安七年落髮して、法光寺道果と號す。

吾人は時頼に於て平時に於ける鎌倉武士の面目を見、時宗に於て戦時に於ける鎌倉武士の標本を見たり。而して二者ともに禪に依りて安心立命の地を得る、

他は推して知るべきのみ。

かくて武士道は時代の推移するに隨ひ、多少の弊風なきにあらざりしも、ますます擴充せられ足利時代を経て戦國時代に至り、世に名將勇士と稱せらるゝものは、殆んど禪の門牆を窺はざるものなきに至り、その禪的思想は一家一族の信仰箇條たる家法家訓の中に融會せられ、不知不識の間に武士の血液となるに至りぬ。今左にその重なるものを擧げて之を證せん。

- 楠正成、少にして一禪者の指導によりて心を禪門に傾けてより參究頗る努め、最後に明極楚俊によりて必要を究明す、その傳ふる所の壁書に曰く、
- 一、唯今日無事ならんことを思へば、萬物一體の理をまもらざるゆゑ萬病生ず。
- 一、理を見て義を思はず。
- 一、人我の心深うして人に勝たんことを思ふべからず。

- 一、身を愛して人のうれひを知らず。
- 一、上に諂ひ下をいやしむ。
- 一、猥に人を譏り身の非をかへりみず。
- 一、外を正直にかざり、内に邪心を含む。
- 一、欲心熾にしてこゝろつねに散亂す。
- 一、善を作すとも身の爲にす身のため善を作すは善に似て悪なり。
- 一、人の善惡を白地にいはす。
- 一、己が邪を專にして物の道理を知らず。
- 一、怒りて理を味まし愛しては非を知らず。
- 一、國の爲諸人に怨あるべきを禁ずべし。
- 一、我に怨あるを報せんといふことなかれ。
- 一、珍膳も毎日向へば味ならず。

- 一、高直の器物をもとめず。
 - 一、餘勢の馬を何かせん、長三寸許ありて遠行勞れず、足の速きを以て良しとす。
 - 一、大刀は骨を切るを以て善しとす、作を好まず。
 - 一、鎧兜は札の善きを佳しとす、毛を鋸るべからず。
 - 一、時に隨ひ直あることを知らず、偏に直にして却て不直を成す。
- 人我の見を斥け、寡慾を獎め、利己心を誡め、私怨を忘れ、萬物相關圓融の理に體達して報國の公義に殉するの至誠、是れ何ぞ禪と相交渉する所なからんや。菊地家は曾て刀夷の來寇を防ぎて功を建てたる藤原隆家の末裔にして、武時に至り、西海に孤立して勤王の義旗を翻す、渠曾て曹洞の大智に參して生死の大問題を參究するや、大智示して曰く
- 夫れ生死の大事を截斷することは、坐禪にすぎたる要徑なし。

とて坐禪を奨め、その倦怠あらんを誠めて

路遙にして馬の力を知り、事久しうして人の心を知るなれば、佛道は順逆の

中に長遠の志を堅く持つを眞實擔當の人といふなり。

と云ひ、また驕奢名利を誠めて、

佛道を行せん在家の菩薩は衣食住の三つ節儉すべし、驕奢名利を好むことな
かれ。

と示し、頗る懇到を極む、武時大に感激する所あり、紫陽山廣福寺を創立し大
智を請して住せしめ、ますく必要を究め、入道して眞空寂阿と稱す。

武時の子武重、また法を大智に問ひ、道號を寂山と稱す、大智、雪中寂山に
示して曰く、

一夜庭前三尺雪、寒威徹骨立人稀。

少林斷臂得髓旨、只許棄身來者知。」

白銀世界玻璃地、一色明邊絶二點埃。

更把虚空一粉碎看、不萌枝上放二開花。」

かくの如く、武時武重相共に心を禪に傾け、れば、その感化は次第に一族に及
び、武重の弟なる木野對馬守武茂は、起請文一通を鳳儀山聖護寺に納めて之
を誓ふ。その一節に曰く、

一、武茂、弓箭の家になつて朝家につかへたてまつる身たる間、天道に應

じ、正直の理をもつて家名をあげ、朝恩に浴し、身をたてんことは三寶の
御ゆるされをかふべく候、其外私の名聞利欲に義を忘れ、耻をかへりみず

へつらへる當世武士の心をながくはなるべく候。

一、私欲の爲め、あるひは親疎によりて五常の道の道にそむくべからず候。

一、公私出仕の外、私のまじはりに名聞榮花を嗜み好むべからず。當世不實

者のふるまひをなし、文武にはづれ國家のついでたらんことをかたく停止

と、私の名聞利欲に義を忘れ、耻をかへりみざるは、南北朝時代に於て、漸く浸染せんとする弊風なりき、渠等一族、此間にありて、名聞利慾の外に超然として、正義を執りて固く動かす、光輝を千歳の下に放つ所以のもの、是れ實に深く禪の感化に由ると云はざるべからず。

世は刈りごもの亂れに亂れ、群雄割據して攻伐相續く戰國の時代にありて、一面には一世の俠雄上杉謙信と相争ひ、他面には徳川家康織田信長を制して鹿を中原に争はんとしたるは武田信玄なり、渠、夙に心を禪に傾け、快川紹喜を惠林寺に請して必要を究め、大に得る所あり、曾て家法數十條を制す、中に云へるあり。

一、戰場に於て聊未練を爲す可からざる事、吳子曰はく生を必ずすれば則ち死し、死を必ずすれば則ち生く。

一、參禪嗜む可き事。語に曰はく、參禪別の秘訣なし、唯生死を思ふ切なり。
一、佛神信す可き事。佛心叶へば則時に力を添ふ。
一、鶻鷹逍遙の事。餘りに耽る可からず、諸の隙を妨げ、不奉公の基なり、語に曰はく、終日紅煎火に奔り自家の珍を識らず。
知るべし、渠が思想の中心點は禪にありたることを、しかして更に信玄と相對して兩々相降らず、龍虎珠を争ふの壯觀を呈せしは上杉謙信也。本朝戰國策に「御本丸に御座被成るも御座の間に一人も不罷在、御次に斗り控へありしは禪學被遊御障りか」とあるによれば、常に默座專念斯道の研究に怠らざりしを察するに足る、而してその師事したる高德中に於て、その最も益を得たるは宗謙禪師にあり、或時微服して宗謙の禪室に到る。
宗謙曰く、達磨不識の意旨作麼生か會す。
謙信黙々として之を久うす。

宗謙曰く、太守尋常口吧々地、這裏に到て作麼説破せざる。

謙信、冷汗背を霑す。

宗謙曰く、此事に相應せんと欲せば、直に大死一回して始めて得べし。

と、かくて、參究する事數ヶ月、遂に桶底を打破せり、その號して不識庵と云ふ

此の達磨不識の公案に因みしなり。

本朝戰國策は、また謙信と法興和尚との法問を記して曰く、法興和尚嘗て登

城せんと欲し、城外に至りしに、謙信出陣の途にあり、法興道を選けて窺に

軍容を見んとす、謙信馬上遙に之を知り、本庄清七郎を磨き、之を問はしめて

曰く、

兵を進むる神速なるを規矩となす、法を弘むるの方便何を以て規矩とするや

此心如何。

法興曰く、兵を進むるに死を先にす、法を弘むるにも死を先にす、今日當體

生を知つて死を知らず。

と、時に謙信馬を下り、更に問て曰く、

弱きを見て退き、強きに對て進む、逆なりや、順なりや。

法興曰く、死を恐れざるものは安く、生を樂しむものは危し、強弱進退、

死生の迷悟、當哉。

謙信曰く、死の中に生在り、生の中に生無し。

法興曰く、珍重々々。

また謙信自その畫像に題せる語句あり、以てその得力の深きを知るに足る。

分明紙上張公子。盡力高聲喚不響。

代云、收因結果。盡始盡終對面無私。

又云咄

其他、太田道灌の雲岡舜徳に參せる、島津元久の石屋眞梁に於ける、大内弘

太田鍋島津
前田等
禪的感化

禪學八面觀

忠の竹居正融に於ける、鍋島清房の玲巖玄波に於ける、前田利家の象山徐芸に於ける皆是れ禪門無字の境を打開し來て千軍萬馬の間に驅馳したるものその流風餘韻は一般武士階級に浸潤し、禪と武士道とは甚深の關係を有するに至れり、而して、更に此關係を深く助けたるものに徳川時代に鈴木正三あり。

渠は三河國加茂郡足助の産にして、家康の關東に移るや、來りて上總國鹽子村に住し、年廿二歳にして本多佐渡守に隨つて關ヶ原の役に役ひ、凱旋するや戦功によりて上番の事を免じて家に歸らしむ。時に正三家を出づるの志ありしも果さず、大阪の役起るや、本多出雲守の營に屬して出陣し、功を以て新に二百五十石を賜はり、翌年春家康の出陣するや、またこれに従ふ時に三十七歳、渠、身を千軍萬馬の中に投じ、死生の間に出入すること十有餘年。天下は既に徳川氏に依りて統一せられ、四海漸く靜穩に歸したるを以て、斷然家を出で、一簑一笠、身を行雲流水に托して、臨濟曹洞の高僧碩學を參問して大に必要を

鈴木正三
徳川武
士

究め、後、三河國加茂郡石平山恩眞寺に住して、化導に従事し、更に江戸に來りて化を布き、明暦元年六月二十五日、年七十歳にして逝く。

渠は前に述ぶるが如く、既に半生を劔戟の間に投じ、幾度か死生の間に出入したるを以て、膽氣固より剛なるに、更に加ふに禪の修養を以てしたるを以てその説く所、峻辣にして一拶人をして心膽を寒からしむるもの尠からず、渠が如きは武士禪の傳道師として最もその當を得たるものと云ふべし、渠、武士の用心を述べて曰く、

前略……夫達道の人といふは本來空なる理を知て、理と義を鍛冶となして日夜此心を鍊鍛て不淨穢惡のあかをさり、清淨無碍の心劍となして、我執貪著の念根を截斷して、萬念に勝得て一切の上に乗て物のために煩ず、不生不滅なるを道人といふなり、又凡夫といふは、幻化の偽をまこととなし、有相執著の私の心を造出、貪瞋痴の念を始めてあらゆる煩惱を起て本心を失、散

禪と武士道

亂の心休事なく、念々發に隨て其念に負て心をくだき、身を苦しめて浮心なく、闇々として空光陰を送、己に迷てたゞよひ、物に逢著するを凡夫心と名付たり、去ば本來の心の異名を知るべし、金剛の正體と云ひ、堅固法身といふ此心物にはかゝはらず、恐ず、驚ず、憂ず、退ず、不動不變にして一切の主
人となる、如此通徹して用得るを大丈夫の漢と云、鐵心肝と云ふ達道人共
いふ、此人萬念に碍られず、萬事を遺得て大自在なり、然間佛道修行の人
は、先勇猛の心なくして難叶、怯弱の心を以佛道に入事あるべからず：
と喝破し、而して、更に世の迷妄心より起る勇氣は時に一世を驚嘆せしむるな
きにあらざるも、畢竟永久的にあらずとして、之を排斥し、眞勇を發揮すべき
を説て曰く、

煩惱心を以武勇樊噲を欺人も臨命終に至て、無常の殺鬼責來らん時、日來の
威勢盡果て、勇猛の心も失て力を出す事あたはず、眼をひらかんとするにい

ろみえず、耳かすかに、舌すくみ物いふ事不叶、心中には殺鬼責入て心肝五
臟を破らんには、出息入息せきつめて、三百六十の骨節、八萬三千の毫竅に
通徹して、苦患強に隨つて、無常の殺鬼に向て臆病をあらはし、死出の山の大
難堪がたく、三途の川におぼれて閻魔の應廷に耻を曝、永三惡四趣に墮在し
て、世々生々耻をさらすべき事、自と云他と云遁かれがたかるべし：：：義有
人ならば勇猛堅固の心劍を以生死の敵を截斷して泰平に住すべし：：：
と、然り、生死の大敵を滅する所、始めて人生の平和は永久に克復せらるゝな
りしかも此の永久の平和は突如として來るものにあらず、常に心を用ひてその
方法を講せざるべからず、こゝに於て渠また條を擧げて示して曰く、

- 一、生死を守る心
- 二、忍をしる心
- 三、一陣にすゝむ心
- 四、因果の理を知る心

- 五、幻化無常を觀する心
- 七、光陰を惜む心
- 九、此身を主君に抛つ心
- 十一、捨身を守る心
- 十三、貴人主君の前に居する心
- 十五、佛語祖語に眼を着る心
- 十七、一大事因縁を思ふ心
- 一、己を忘れて心をぬかす油斷の心
- 三、義理を知らざる心
- 五、無常幻化を知らざる心
- 七、花美奢りの心
- 六、此身の不淨を觀する心
- 八、三寶を信仰する心
- 十、自己を守る心
- 十二、自己の非を知る心
- 十四、仁義を守る心
- 十六、慈悲正直の心
- 二、遊山活計歡樂の心
- 四、因果の理を知らざる心
- 六、名聞利養を思ふ心
- 八、狐疑不信の心

- 九、物にすぎ好一切著するの心
 - 十一、慳貪無慈悲の心
 - 十三、我執自慢の心
 - 十五、恩を知らざる心
 - 十七、生死を忘る心
 - 十、怯弱にして勇のなき心
 - 十二、他の是非を思ふ心
 - 十四、愛念嫉妬の心
 - 十六、諂誑諂曲の心
- 執著心より起る所謂「物に負て沈む心」を退治して、勇猛心より起る「物に勝て浮ぶ心」を存養し發達するを教ふ、是れ實に適切なる武士の信仰箇條にあらずや、渠は此の如く大膽に露骨に且つ適切に武士禪を説くを以て、佛教を信するもの、動もすれば柔和優順に偏し、機に應じ變に處して、活發無碍の活動なきを罵りて死漢となし、常に二王坐禪を説て曰く、
- 佛道修行は佛像を手本として修すべし、佛像と云ふは、初心の人如來像に眼を著て如來坐禪は及べからず、只二王不動の像等に眼を著て二王坐禪を作す

べし、先づ二王は佛法の入口、不動は佛の始と覺えたり、然れば二王は門に立ち頭に不動は十三佛の始に在ます、彼の機を受ずんば煩惱に負べし、只一頭に強き心を用るの外なし、然るに今時佛法廢れてすべてあしく成て活た機を用る者なし皆死漢計り也、佛道には活漢とて活た機を用る事也、是を知らず、殊勝になり柔和になり、沈み入て佛法と思へり……と、何ぞそれ痛快なるや。

正三逝て後澤庵あり、渠は着眼奇警にして辯舌巧妙、能く卑近の事實を捉げ來りて高妙深遠の理を説く、徳川の基礎漸く鞏固となり社會の風潮奢侈に移らんとするや、先づ針砭を下して曰く、「衣食住居に結構をつくす世ならば、世間つかるべし、如何となれば金銀足りて結構する人は、百人に五人あるべからず、百人に五人はあるべしと思へども、千人に五十人、萬人に五百人なり、然れば萬人あつて其中に五百人金銀足る人これあるべからず、百人に一人あるときは、

則ち萬人に百人あるなり、福人の結構を盡すはさもあるべし、それ猶は奢りは大和唐もきらふたることなり。萬人の中百人は餘りありてする結構なり、九千九百人は福人にならうて及ばざる事をする故に世間の心疲る、其金銀足りたる百人の方を押へて、奢りを止めさせたらば、自ら萬人ともに奢りが止みて世は安かるべし、世間のつかれ、人の惡になり、屋焼、人殺をするも、其の本を尋ぬれば、侈りに事足らざるより起るものなり」と、而して渠は更に直接將軍家光の頭上に痛棒を與へて曰く、「それ天下を領する者、珍奇異物を我有と爲し、高爵に進む者は非なり、珍奇異物は散じて天下のものに與ふべし、高爵は辭して進むべからず、其故如何となれば、天下を領する上は、天下は皆我倉庫の中なり、矧んや、珍器異物と雖も求め難きにあらず、求め易きを以て寶とせば理當然なるにあらず、若し其所用にあたる時は則ち天下みな我倉庫の中なり、豈に之を用ひ難からんや、又天下を領する時は、則ち權威を以て官爵するは進

神學八面觀

み難きにあらず、進みやすきを以て進むものは所特にあらず、布衣にして天下を安んず、これ難い哉」と誠め、また一面、柳生宗矩を通じて大に劍禪一味の道を鼓吹し武膽禪膽を陶冶せり。

唯是れ一介の武夫、しかも文武兼備はり、隱然として徳川幕府に對し一敵國の觀ありしは山鹿素行なり、渠は天縱の才を以て博く儒釋百家の精粹を汲集し融會して自家の哲學を組織したるを以て、敢て禪に専らなりしにあらざるも、その自ら記して、

朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、心性の作用、天地一枚の妙用、高く明成様に被存候て、何事も本心自性の用を以て仕候故滯處無之、乾坤打破仕候ても、萬代不變の一理は惺々洒落たる所無疑存候と云ひしを見れば、渠が禪に得る所の尠少ならざりしは推知するに足る、而して素行の感化を受け日本武士の精華として賞揚せらるゝ大石良雄に至りては、

その禪的修養の更に深きを見る。

蓋し渠の活動したる、元祿の時代は、徳川初期の勤儉質實なる美風も、太平に馴るゝに隨ひ、一變して、華奢淫媚の俗となり、武士道の名あるも、その實漸くその名に副はざるの觀ありき、此時に當り、霹靂一聲、天下を驚倒し警醒せる大事件あり、所謂、赤穂義士の快舉是れなり、是れ實に廢頽せる武士道に對する一大警鐘たりしなり、予は茲にその始終を精叙するの要を見ざるも、今はその中心人物たりし、大石義雄に就て、一瞥せんとす。

渠に對する批評は一々之を擧ぐるの煩に堪へざるも、最も肯綮に當れるものとしては、餘熊耳の論ならんか、餘氏は徂徠の門に學び、後、唐津侯に仕へ、古文辭に巧みに、當時の李子鱗を以て稱せらるゝ、その「義臣大石氏の書後に題す」と云へる文中に曰く、

夫れ大石氏は其黨四十六人と一朝〇〇之君を刺し、父を眡するの讐を復し、

禪と武士道

死以て其の主しゆに地下ちかに報はうす、則ち慷慨節かうがいせつを立つ、古いにしへの國士こくし豫讓よじやうの流亞りうあなり、何ぞ又文雅君子ぶんがくくんしの風此ふうかくの如ごとき者あるを得えんや、蓋し是れ其の大石氏おほいししたる所以ゆゑんか、其の于ほこに枕まくらし隙ひまを窺うかがふの間に方あたり、潜行せんかう避さぐるが如ごとく、惰遊だゆう廢はいを示しし、性を忍しのび時ときを待まちち、曠日持久くわうじつちきう、乃すなはち能よく響あを以て動うごかす驚おどかしめず夷然いぜん之これに居をり、而しかして之これが戒かいを爲なすを忘わするゝに至いたらしめ、竟つひに兵へいを提ひげて臥内ふしなに入り三躍やく之これを其の身みに達たつするを得え、謀はかりて則ち然しかると雖いんど、而しかも唯剛たごうにして克よく柔じゆうならず、事ことに暴卒ほうそつの間あひだに行おこなひ、而しかして成敗せいばいを顧かみざる者ものの及およぶ所ところなるものならんや、且かつ夫れ四十六よじゅうろく、人ひとや衆おほし、而しかも之これを率ひきふるに義ぎを以てし、各おのをして死しを見ること歸きするが如ごとく、心こころを一ひとにし力を戮あはせ、其の志こころざしを變へんするなく、誓ちかひを受け約やくを奉ほうじ、唯我たがれ是れ視しめさしめ、以て一大事だいじを濟なす、則ち亦また以て其人そのひとを觀みるべきなり、苟いやしくも徳とくある者ものにあらずんば何を以てか、其の始はじめめ之これに應おこするや、響ひびのごときを以てし、而しかも其の終はり之これに従したがふや、影かげのごとき

を以てし、以て周還しゆうわんすること乃すなはち此かくの如ごときを得えんや。

と、智ちあるもの必かならずしも勇ゆうあらず、勇ゆうあるもの必かならずしも徳とくあらず、此この三者しゃを兼かぬるものに至いたりては修養しゆうやうする所ところ、甚深じんしんなるものにあざれば能あたはざる所ところなり、知らず、渠かねは何人なんびとの爐鞴ろはうに入りて此この性格せいかくを陶冶たうやし來きたる、こゝに至いたりて予よは當あたり時とき禪林ぜんりんの偉傑ゐけつたりし正眼國師せうげんこくし盤珪はんけいを紹介せうかいせざるを得えず。

正眼國師せうげんこくし名なは永琢えいたく、盤珪はんけいと號がうす、播摩國はりまのくに楫西郡濱田しげんはまたの人ひと、隨應寺ずいおうじの雲甫うんぷに就つて得度とくどし、了堂りやうだう、愚堂ぐだう、道者等だうしやらの名匠めいしやうに歷れき參さんして玄微げんびを究盡きうじんし、龍門寺りゆうもんじ、三友さんゆう寺じ、遍照庵へんざうあん、妙心寺等めうしんじとうに歷れき住じゆうし、名聲都鄙めいせいとひに遍あまく、化風東西けふうとうざいに揚あがる、生前せいぜん

「佛智弘濟ぶつちこうさい」の禪師號ぜんじがうを賜たまはるや、その一節せつに
前住妙心永琢ぜんじゆうめうしんえいたく和尚しやうは、關山くわんざんの的孫てきそん、牧翁ぼくおうの印證いんしやう、七通八達しちつうはつたつ、大道だうだうを發はつし、千差萬別せんしやばんべつ、一源いつげんに歸きす、諸州しよしゆうの精藍せいらんに蒞のぞみて、丕おほいに勝會しやうかいを開ひらき、廢刹遺蹟はいしやくゐじやくを起おこして、普あまく群機ぐんきに示しめす、寔まことに維ぞつれ絶倫ぜつりんの俊英しゆんえいなり。

と、更に滅後五十回忌に「大法正眼」の國師號を賜はるや、その一節に
 關山國師十六世の孫、佛智弘濟禪師盤珪和尚は、禪林の棟梁、釋門の豪
 英、法海智津、道は一宗の風を振ひ、慈雲慧日、化は八紘の外に被る。と
 と稱揚せらる、以て盤珪が虚喝盲棒の禪僧にあらざりしを知るに足る、蓋し、
 大石義雄の參じたるは、國師が綱干の龍門寺に於て化を揚げたる時ならん、そ
 の室内の提撕は、今詳にするを得ざるも、盤珪より得たる硯に題せる語に曰く、
 予、嘗て盤珪和尚に參禪す、師曰く、本來不生、予會せず。今春、聊か其の
 趣を識ることあり、直に和尚に到て擧す、師曰く、是々、時に師の傍に一
 の硯を見る、師曰く是は則ち西行法師自作の石なり、予曰く、不然、師曰く
 即今何人か作る、予曰く、西行未だ生ぜざる已前、某の作る所なりと。師微
 笑して曰く、爾に出でたるものは須らく爾に返るべしと、以て予に贈らる。
 予辭せず拜受して歸る。

と、渠が天地未だ剖判せず、釋迦未だ出生せず、達磨未だ東來せず、西行未だ
 出世せざる以前の端的を看破せるを知るに足る。
 惟ふに渠が國難に遭遇して從容迫らず、その盡すべきを盡し、遂に藩の命運
 如何ともなし難きを見るや、熱烈なる誠忠の志を包むに、酒肆淫房の遊戯三
 昧を以てし、褒貶關せず、毀譽念とせず、潛行密用、愚の如く魯の如くにして
 閑日月を打し、しかも機一度熟するや、擊石火、閃電光、能く先君の志を遂
 げ臣道の本務を盡し、武士道の典型として、今猶ほ冥々の中に士氣を鼓舞策勵
 す、その由て來る所、盤珪の痛棒下より得來るものならずとせんや。
 更に進んで大小の藩々に就て、武士道なるものを尋ね、その禪的關係を擧げ
 んか、固より此一小篇の能く盡す所にあらざるも、大小名の菩提寺なるものを檢
 するに、臨濟、曹洞、黃檗の所謂禪三派に屬するもの百五十六藩の多數に上りし
 の一事を以てするも、以て其關係の甚深なりし一斑を推知するに足るべし。

五 禪と劍道

機、玄樞に發して青天に電を激し、眼、紫光を含んで白日に星を見る、禪僧に此の機用なくんば、徒に是れ枯木堂中の死漢たるを免れず、劍客に此の修養なくんば惜むらくは是れ劍刃鋒上の守株漢たるに過ぎず、由來、禪道劍道相交渉し來れること久し、今その一斑を記せんか。

蓋し我國民性の特長は哲學にあらす、宗教にあらす、藝術にあらす、此等は他の民族に比して寧ろ貧弱なるを免れず、しかれども武勇を尙ぶの一事に至りては、頗るその誇るべきものあるを見る、而して此の尙武的國民性の最も能く發露したるものを劍道とす。

劍法の起源たるや遠うして遠し、彼の武藝者の傳ふる所に依れば、源を武甕槌、經津主命に發し、日本武尊に傳はり、一脈の傳燈、源義家に至り、更に數傳

原劍道の起

派劍道の流

して鎮西八郎爲朝の、肥後の人尾伊手則高に學ぶに至つて技漸く精しく、源義經の鞍馬に學びて八天狗流の祖發すと云はる、然れどもこれ等は皆無師獨悟の小乘禪の如きか、劍道として立つに至りしものは、下總の人、飯篠山城守入道長威齋の鹿島香取の兩神宮即ち武甕槌、經津主の二神に參籠して、極意を悟得したるに初り、之を天真正傳神道流と云ふ、これと殆んど同時に愛洲惟孝なるもの、日向の鶴殿權現に參籠して劍術の秘奥を自得し、之を陰流と云ふ、長威軒の門人に塚原土佐守あり、その子を卜傳と云ふ、卜傳更に陰流に新工夫を加へたる上泉伊勢守信綱の新陰流を學びて別に一家を成すに至る傳ふる所の心法多く禪に類す、外に中條流なるものあり、相摸國鎌倉の人、中條兵庫助、同地地福寺の僧慈音によりて刀槍の秘術を授けらる、或は云ふ、慈音、日向鶴殿の岩窟に於て夢中に劍法の極意を得ると、兵庫助の門に大橋勘解由左衛門あり、その門に富田九郎右衛門を出し、富田家相繼ぎて、山崎左近將監、長谷川宗喜、

禪と劍道

鐘卷自齋を出し、自齋の門に伊藤一刀齋あり、長威齋の門に出でたる一羽流、弘流あり、上泉伊勢守の流を汲める疋田陰流、柳生流あり、その他二天流あり、東軍流あり各流派を分ち師資相承すること頗る禪と相類す、しかも今はその流派の異同特色を述ぶるに違あらず、たゞ二三の代表的人物の言行によりて、如何にその禪の感化に負ふ所尠からざりしかを一瞥せんとす。

宮本武藏

宮本武藏の剣道の達人なりしことは、兒童走卒も能く之を知る、しかも渠は世の所謂氣に勝ち技に誇り自貢自負するの劍客にあらず、その自ら戒むること太だ深く、自戒の文十九條を定めて曰く、

- 一、世々の道に背くことなし。
- 一、よろづ依估の心なし。
- 三、身に樂をたくまらず。
- 四、一生の間欲心なし。

- 五、我事に於て後悔せず。
- 六、善惡につき他を妬まず。
- 七、何の道にも別を悲まず。
- 八、自他共に恨み啣つ心なし。
- 九、戀慕の思なし。
- 十、物事に數奇好みなし。
- 十一、居室に望なし。
- 十二、身一つに美食を好まず。
- 十三、舊き道具を所持せず。
- 十四、我身にとり物を忌むことなし。
- 十五、兵具は格別、餘の道具たしなまず。
- 十六、道にあたつて死を厭はず。

十七、老後財寶所領に心なし。

十八、神佛を尊み神佛を頼まず。

十九、心常に兵法の道を離れず。

以て、渠が名譽に眩惑せず、財慾に貪着せず、權勢に阿らず、儉素自ら安んじたるかを知るに足る、殊に「神佛を尊み神佛を頼まず」と云へるが如き、その識見の凡ならざるを知るべし、また兵法中に心持の事を示し

心の持ちやうは、めらず、からず、たくまず、おそれず、直ぐに廣くして、意のこゝろ軽く、心の心重く、心を水にして、折りに觸れ、事に應ずる心なり、水に碧潭の色あり、一滴もあり、滄海もあり、よくよく吟味すべし。

と云ひ、最後に萬理一空の事と題して、萬理一空の所、書きあらはし難く候へば、おのづから御工夫なさるべきものなり。

と云ふ、是れ豈に尋常劍客の能く道破し得る所ならんや、是れ渠が禪僧春山の痛棒を喫したるに由らすんばあらず、また印可秘傳の句としては、

春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時。

と云ひ、

敵もなく我れもなきさのあま小舟

漕ぎ行く先は波のまにまに

劍術を何と答へん岩間もる

つゆのしづくにうつる月影

思ひなく巧みもあらぬ無想には

虎さへ爪の置きどころなし

と云へるにありと云ふ、ますく以て渠が劍禪一致の境を知るに足る。劍道を談ずるに逸すべからざるは、澤庵と柳生但馬守との關係なり。

澤庵、名を宗彰と云ひ、天正元年を以て但馬出石に生る。十歳にして薙髮し、淨土宗の僧となりしが、十五歳の時、轉じて宗鏡寺の西堂希先に從て禪を學び、後、大徳寺に入り、また明堂の道名、世に高かりしにより之に和泉に隨ふこと數年、道聲漸く世に聞え、慶長十二年大徳寺の第一座に陞る。然れども澤庵は天資隱逸を好み榮華を追尋することを屑しとせざりしを以て、乃ち住山三月にして退いて和泉に歸り、爾後、豊臣秀頼、細川忠興の招聘ありしも出でず、同年八月京都大仙院に寓し、又去て和泉天下邑に退き、元和三年、大和の共林庵に移り、更に山城の妙勝寺に避け、後また轉じて郷國但馬に歸り、庵室を結びて屏居したるも、その名はます／＼現はれ、偶々京に入るや、後陽成天皇の召見したまはんとのことなりしも辭して應せず、和泉の谷氏祥雲寺を創して開山と仰げるより、終に諾して開堂し、後ち大徳寺の事によりて幕府に抗議し羽州上城に謫せられしも、居ること四年にして歸國を許され、その歸途

入京して後水尾上皇の爲めに法を説き、翌年幕府の命を受けて東上し、將軍家光に謁して禪要を説く、家光大にその見處に感じ、寛永十五年、武州品川に地を卜して一字を建て、萬松山東海寺と云ひ、請して開山に仰ぎ、常に往來して必要を參究す、かくて正保二年十二月に至り終に病を以て逝く、年七十三。蓋し徳川幕府の名實俱に備り天下に號令したるは家光の時代であり、此時に當り、澤庵が家光の歸崇を受けたるは、禪風を武門の間に布くに最も好便宜を得たるや、論を待たず、殊に澤庵は枯木堂中に死座するの禪僧にあらずして機に應じ、時に隨ひ禪風を鼓吹するに妙を得て、當時第一流の劍道家たる柳生但馬守の如き、その膝下に教を請ふの状態なりしを以て、澤庵の名は、當時の禪林武門を通じて雷霆の如くに響きたり、されば渠が柳生宗矩に與へて劍禪を談じたる『不動智神妙録』は、後世に至るまで斯道の權威として尊重せらる、今その要所の二三を擧げんに、不動智を論じて曰く、

前略：諸佛不動智と申す事は、不動とは、うごかずといふ文字にて候。智は智慧の智にて候。不動と申し候て、石か木のやうに無性なる義理にてはなく候。向ふへも、左へも、右へも、十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、卒度も止まらぬ心を不動智と申し候。不動明王と申して右の手に劍を握り、左の手に繩を取て、齒を喰出し、目をいからし、佛法を妨げん惡魔を降伏せんとて、つゝ立て居られ候姿もあの様なるが、何國の世界にもかくれて居られ候にてはなし。容をば佛法守護の形につくり、體をばこの不動智を體として、衆生に見せたるにて候。：然れば不動明王と申すも人の一心の動かぬ所を申し候。我が身を動轉せぬことにて候。動轉せぬとは、物毎に留らぬ事にて候。物一見見て其の心を止めぬを不動と申し候。たとへば十人にて一太刀づゝ我へ太刀を入るゝも、一太刀をうけ流して、跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候はゞ十人ながらへ働を缺かぬにて候。

不動智

應無所住而生其心

十人十度心は働け共、一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は缺け申す間敷候。若し又一人の前に心が止り候はゞ、一人の打太刀をば打流すべけれど、二人めの時は、手前の働抜け可申候。と、急水上に球子を轉するが如くにして、執せず、着せず、而してまた枯寂死灰に陥めらすして、觸る所に活機あり、妙趣ある、之を應無所住而生其心と云ふ、渠は、更にその意を示して曰く、萬の業をするに、せうと思ふ心が生ずれば、其のする事に心が止るなり、然る間、止るなくして心を生ずべしとなり、心の生ずる所に生ぜざれば手も行かず、行けばそこに止まる、心を生じて其の事をしながら止まる事なきを諸道の名人と申すなり、此の止まる心から執着の心起り、輪廻も是より起り、此の止まる心生死のきづなと成申し候。花紅葉を見て花紅葉を見る心は生じながら、其の所に止らぬを證と致し候。：貴殿の兵法に當て申し候はゞ

太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打つて人を切れ、人に心を置くな、人も空、我也空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまいぞ、鎌倉の無學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裡斬春風といふ偈を作りければ、太刀をば捨て、趁りたると也、無學の心は太刀をひらりと振り上げたるは稲光の如く、電光のピカリとする間、何の心も何の念もないぞ、打つ刀も心はなし、切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば打つ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たるゝ我も稲光のピカリとする内に春の空を吹く風を切る如くなり、一切止まらぬ心なり、風を切たのは太刀に覺えもあるまいぞ、かやうに心を忘れ切て萬の事をするが上手の位なり、舞を舞へば手に扇を取り足踏む、其の手足を能くせむ舞を能くせむと思ひて忘れきらねば上手とは申されず候、未だ手足に心止まらば業は面白かるまじ、悉皆心を捨て

きらずしてする所作は皆惡敷候

と、蓋し道は一なり、一は遍満す、人一度此の靈機を活捉せんか、劍と禪と豈に別事ならんや、若しそれ此の妙趣を解せずして心を技術の末に勞せんか、時に他の俗眼を瞞し得んも、畢竟一場の兒戲たらんのみ、かくて渠は更に之を擴充して曰く、

貴殿事(柳生宗矩を指す)古今無双の達人故、當時官位俸祿世の聞えも美々敷候、此の一大厚恩を寐ねても覺めても忘るゝことなく、旦夕恩を報じ忠を盡くさんことをのみ思ひ玉ふべし、忠を盡くすといふは、先づ我が心を正しくし、身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々に仕出怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡し、夫婦の間少しも猥になく禮義正しく、妾婦を愛せず、色の道をたち、父母の間おごそかに道を以てし、下を使ふに私にへだてなく善人を用ゐ近付け、我が足らざる所を諫め、御國の政を正敷、不

善人をば遠ざく様にするときは、善人は日々に進み、不善人はおのづから、主人の善を好む所に化せられ、悪を去り、善に遷るなり、如此君臣上下善人にして、慾薄く奢を止むる時は、國に寶滿ちて、民も豊かに治り、子は親をたしめ、手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初めなり、この金鐵の二心なき兵を、以上様々の御時、御用に立てたらば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし、則ち先きに云ふ所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立つが如く、貴殿の兵衛の心正しければ、一心の働自在にして、數千人の敵をも一劍に随ゆるが如し、是れ大忠にあらずや。と、何ぞそれ周到にして懇切なるや、渠は劍道を以てたゞに一勝一敗の上に功を競ひ名を争ふの技術たらしめずして、心を正うし、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平にするの大道たらしめんとせり、こゝに於て武術上の最高理想と、禪の究竟原理とは融會一致するに至る、澤庵の功績また偉大なりと云ふべし。

降りて近代に於ける劍禪一味の偉傑を擧げんか、先づ指を山岡鐵舟に屈せざるを得ず、而して渠が斯道に刻苦精勵せしは、洵に他の容易に企及すべからざるものあり、渠、曾て自ら修道の徑路を記して曰く、
年十三の頃、又生父の訓誨に曰く、苟も身を武門に委ぬるものは、忠孝の志夢々忘る可からずとの嚴訓を蒙るに至れり、而して父の曰く、人苟も斯道を極めんと欲せば、形に武藝を講じ、心に禪理を修練すること第一の肝要なりと仰せられたり、故に余は爾後斯の二道に心を潜めんと欲するに至れり、是に於て日夜劍法を修めて其技法を練習すること數年に至れども、然れども禪理に於ては未だ其門に接するの機會を得ざりしが、余年二十歳の頃、たまたま僧某と相會し、談武士道に及び、理論禪理に至る、其義頗ぶる感ずる所あり、僧も亦側に余に修禪の要を勸むる者の如し、余も亦之を肯じ、始めて

芝村長徳寺の願翁に參じて、其道を問ふ、願翁直に本來無一物の五字を擧げて余に授け、附して曰く、貴殿は武人にして日夜劍法を修業せらるゝ由、定めし、武場に入りて技を較する時は、敵は必らず貴殿に迫り來るべし、其時貴殿の心裏果して如何、或は心に恐懼を來たして動ずる事あるべし、是れ未だしなる所なり、若し一度、本來無一物の義釋然たるに至らば、敵白刃を揮うて此方に迫るも、靜然として動ずるの色なく、恰も坦途曠路を行くが如くなるべしと、余は此の言を諒して辭し歸り、日夜苦慮して考案を廻らし、晝は武場に立ちて竹刀を振り、夜は無人の室に隠れて瞑目正坐し、其眞理を究めんとす、たま／＼感ずる所あれば、翌日直に其技を試み間然する所あれば、倉皇趨つて願翁の許に參じて疑心を質す、如斯する事數年、或は釋然たるが如くにして暗闇たり、恰も霧中に山を望まんと欲するの形なり、時に或はものいちらしく感ぜられたる事なきにしもあらざりし、然れども風雨寒

暑と雖も、君父の要用を除くの外、未だ嘗て忘りたる事なし、一進一退一惑、口之を狀すべからざるものあり、此の如きは眞に馬鹿ならでは逆も眞似し得べきものにあらずと感ぜられし事あり、然り而して余が志操愈々堅し、此の如くするもの約十年なりし、愈修むれば、愈迷ふ、是に於てか修劍の餘暇、更に禪理を星定に聽く、星定は豆州三島驛の西里餘の所、龍澤寺の住僧なり、寺は我が江戸を去る事三十餘里、吾れ公私の餘暇、必らず拂曉江戸を發し、騎して函嶺を越ゆ、時刻既に夜半、予此時頗ぶる生涯の平生に殊なるを覺ゆるなり、歩を進みて即夜四更始めて龍澤寺に到る、到れば則ち先づ星定に參じ、胸襟を啓きて道を聽き終つて飯を喫す、大準水を飲みて食を下すを例とす、祁寒と雖も、未だ嘗て難色あらざりしは、幸なり、此の如くにして今日に至ると雖も我が誠の厚からざるが爲めに、猶ほ未だ豁然たらざるものあり、然れども未だ嘗て倦色なく、十年一日の如し、さればにや、之を十

年の昔に比せば又其上達幾倍なるを知らず、嗚呼、今日に至りて、既往を回想すれば眞に是れ夢中の大夢、人事の不可思議なる事總て斯の如きか。願翁に參じ、更に時々函嶺の險を越えて星定の室を敲きたるがごとき、豈に世の薄志弱行の徒の能くする所ならんや、渠は未だ深く透徹する所なかりしも、此間に於て渠が豪膽猛志はますく鍛鍊を加へられ、後に至りては滴水の下に於て始めて桶底を脱せり、渠また記して曰く、

余少壯の頃より武藝を學び、心を禪理に潜むること久矣、感ずる所は必らず形に試み、以て今日に至る、年九才の頃、初めて劍法を久須美閑適齋に學び續いて井上清虎、千葉周作、或は齋藤、桃井等に受け、其他の諸流の壯士と共に試合する事、其數幾千萬なるを知らず、斯斯して刻苦精思する事凡そ二十年、然れども未だ嘗て安心の地に至るを得ず、是に於てか銳意進取して劍道明眼の人を四方に索むと雖も、更に其人に遇ふ能はず、偶々一刀流の達

人淺利又七郎義明と云ふ人あり、奥平家家法師範中西子正の次男にして伊藤一刀齋景久の傳流を嗣ぎ、頗る上達の人と云ふ、余之を聞き喜で行て試合を請ふ、果して世上流行する所の劍術と大に其趣きを異にするものあり、外柔にして内剛なり、精神を呼吸に凝し、勝機を未撃に知る、眞に明眼の達人と云ふ可し、是より試合することに遠く其不及を知る、爾來修業不怠と雖も、淺利に可勝の方法あらざるなり、是より後晝は諸人と試合をなし、夜は獨り坐して其呼吸を精考す、眼を閉ちて專念呼吸を凝し、想ひ淺利に對するの念に至れば、彼れ忽ち余が劍の前に現はれ、恰も山に對するが如し、眞に當るべからざるものとす、余が修業如斯と雖も、未だ其蘊義に徹入せざる所以のものは、性來の愚鈍と忠誠の足らざるとに因らずんばならず、余嘗て滴水に參じて禪理を聞く、先づ吾れ劍法と禪理とを合せ、其揆一なる所を細論す、滴水曰く、善哉言也、然れども愚僧等の道を以て包みなく一言すれば、貴下

の現在げんざいは恰あたも眼鏡めがねを隔へだて、物ものを視みるが如ごとし、眼鏡素めがねもとより明白めいはくにして分ぶん分の視し力を妨りよくげずと雖いんども、本ほん來らい肉にく眼がんに一いつ點てんの疾やまひなき人ひとは、如何いかなる明めい鏡きやうと雖いんども、尋じん常物じやうぶつを視みるに於おいて之これを用もちゆるの要えうなきのみならず、用もちゆれば變へん則そくなり、用もちひざるを以もつて自然しぜんとす、貴下きかの現在げんざいは既すでに此境このきやうに達たつせり、若もし一度たび此障物このしやうぶつを去きる事ことを得えば忽たちまち御所望ごしやうぼうの極底きよくていに達たつすることを得うべし、況いはんや貴下きかは劍禪兼至けんぜんかねいたるの人ひとなり、一朝てうくわつねん豁くわつ然ぜんとして悟道ごだうせられなば殺活自在せつくわつじざい神通遊化しんつうゆけの境きやうに到いたらんと、渠かれは滴水てきすゐの提撕ていせいを受うくこと十餘年じゆねん玄關げんくわんの一著いちぢやく摸索もくさくしず、更さらに滴水てきすゐに參さんして、兩刃交鋒不須避りゆうびんかうふうふしゆひ、好手還同こうしゆえんどう二火裏蓮にくわにれん、宛然自有えんぜんじゆりゆう二衝天氣にしやうてんき、の公案こうあんを拈提ねんていすること約三年やくさんねん一日豪商某いちぢつごうしやうぼう、來きたて自己じこの經歷けいれきを談だんする話わちう中に大おほいに感觸かんしよくする所ところあり、爾來じらいます／＼精思沈考せいしちんかうすること數日すうじつにして釋然しやくぜんとして天地物なきの心境てんちものしんきやうに坐ざせるの感かんあるを覺おぼゆ、茲こゝに於おいて師淺利義明しあさりぎあきを招まねきて技ぎを角かくするに、淺井既あさひにその技ぎの神妙しんめうに達たつするを賞しょうして、一刀齋たうさいの所謂無相流いはいるむさうりゆうの極致きよくちを傳つたふ、時ときに明治十三年めいじじゆんさん三

月十三日ぐわつじゆつなりき。しかも渠かれは猶なほこれに安やすせず、ます／＼擴充くわくじやうし精究せいきゆうして遂つひに無刀流むたうりゆうの一派いぱを開ひらくに至いたる、而しかしてその極致きよくちを論ろんじて曰いはく

余よの劍法けんぽうや、只管ひたすら其技そのぎを之これれ重おもするにあらざるなり、其心理そのしんりの極致きよくちに悟入ごにふせん事ことを欲ほつするにあるのみ。換言くわんげんすれば天道てんたうの發源はつげんを極きはめ、併あはせて其用法そのようはふを辨べんせんことを願ねがふにあり。猶なほ切言せつげんすれば、見性悟道けんしやうごだうなるのみ。

學まな劍勞けんらう心數十年しんじゆんじゆんねん。臨機應變りんきおうえん守愈堅しゆいけん。

一朝壘壁皆摧破いちぢやくいへきがひ。露影湛如還覺るうえいせんじゆ全ぜん。

論ろん心總しんじゆん是惑しよく心中しんじゆん。凝滯輸贏ねいじゆいしゆりやう還失えんしつ工こう。

要えう識し劍家精妙處けんかせいめうちよ。電光影裏斷春風でんかうえいりだんしゆんぷう。

鐵舟てつしゆの劍禪けんぜんを一瞥いつべつしたる吾人ごじんは、勝海舟かつかいしゆを放過はうくわすることを得えず、海舟かいしゆの世よに知らるゝや、固もとより劍けんにあらず禪ぜんにあらざるも、渠かれが難なんに當あたりて驚おどろかず、死中しちゆう能よく活くわつを得えたるもの、その劍禪けんぜん一味いみの修養しゆやうより得來えきたるものと云いはざるべからず

故に自ら告白して曰く、

本當に修行したのは劍術ばかりだ、全體おれの家が劍術の家筋だから、おれの親父も骨折て修業させやうと思つて、當時劍術の指南をして居つた島田虎之助といふ人に就けた、此人は世間なみの擊劍家とは違ふ所があつて、始終今時みながやり居る劍術はかたばかりだ、折角の事に足下は眞正の劍術をやりなさいと云うて居た、それから島田の塾へ寄宿して自分で薪水の勞を取て修業した……彼の島田と云ふ先生が劍術の奥意を極めるには、先づ禪學を始めよと勧めた、それでたしか十九か二十の時であつた、牛島の廣徳寺と云ふ寺に行つて禪學を始めた。

劍勝海舟の

大勢の坊主と禪堂に坐禪を組んで居ると、和尚が棒を持つて來て、不意に坐禪して居る者の肩を叩く、すると、片端から顛れる、なに、皆が坐しても、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら色々の事を考へて、心が何處にか

飛んでしまつてゐる。そこを叩かれるから、喫驚してころげるのだ。おれなんかも、始めは此のひつくり返へる連中であつたが、段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、唯僅か目を開いて視る位の所に達した。かうして殆んど四ヶ年間、眞面目に修業した。此の坐禪と劍術とが老爺の土臺となつて、後年大層爲めになつた。瓦解の時分、萬死の境を出入して、つひに一生を全うしたのは、全く此の二つの功であつた。ある時分、澤山刺客やなんかにおびやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力とは、必竟此の二つに養はれたのだ、危難に際會して逃られぬ場合と見たら、先づ身命を捨て、かゝつた、而して不思議にも一度も死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存在するのだ。人一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し胸跳り、措置却て顛倒し、進退度を失するの患を免れることは出來ない、もし或は遁れて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來

禪と劍道

りて相手に乗せられる事、大小となく、此の規則に支配せられるのだ。
おれは此の人間精神上の作用を悟了して、何時も先づ勝敗の念を度外に置き
虚心坦懐、事變に處した、夫れで小にしては刺客、亂暴人の厄を免れ、大に
しては瓦解前後の難局に處して、綽々として餘地を有つた。是れ必竟、劍術
と禪學の二道より得來つた賜であつた。

要するに一輪一贏に凝滞して巧を弄し技を競ふが如きは、未だ劍道途中の活
計たるを免れざるものにして、猶ほ是れ一機一境に棒喝を行じ、以て禪の真髓
を得たりとなすものと一般、理より入りて理を忘じ、技を學んで技を忘じ、理
智一如、機境圓融、隨處に拈來りて無碍なるのみ、何ぞ他の紅粉を將ち來りて
故らに修飾することを要するものならんや。

六 禪 と 文 學 (上)

釋迦文佛は四十九年一字不説と喝破せしも、不説の説は、白馬、經を馱して
漢土に入りしより傳譯せらるゝもの數千部の多きに達し、その高妙幽玄の想は
圓熟せる毫端に溢れて、遂に王弼州をして、楞嚴の宏博なる、維摩の奇肆なる
鬼谷淮南の上に駸々乎たりと讚歎せしむるに至る、禪は固より教外別傳不立文
字を標榜し、他の經論疏釋に依らず、或は拳頭を拈起し、或は鼻孔を扭得して
立地に成佛得脱せしめ、文字言句の閑葛藤を執するものにあらざるも、看來れ
ば舌相徧く三千を覆ふ、何れの山海か佛經にあらざる、佛口永に萬古に開く
何れの時節が經典にあらざらん、是を以て不立文字の處、毫端を捉げ來りて自
家の寶藏を寫し出し、教外別傳の境、文字を拈じ得て、心地の光明を發揮す、
詩や固より第一義に到りて言亡慮絶なり、理路絶し、慮知亡する處、僅に詠嘆

禪學八面觀

あり、文字あり、詩と禪と、豈にそれ交渉なしと云はんや。故に嚴滄浪曰く、禪家者流、乘に小大あり、宗に南北あり、道に邪正あり、學者須らく最乘に従ひ、正法眼を具し、第一義を悟るべし、小乘禪、聲聞辟支果の若きは皆正にあらざるなり、詩を論ずるは禪を論ずるが如し、大抵、禪道は妙悟にあり、詩道も亦た妙悟にあり。

と、詩禪一味の論、洵に千舌の卓見と云ふべし、若しそれ、語を尋ね、句を逐ひ、たゞ凝思冥想するは禪の邪路にして、文を咬み、字を嚼み、篇を連ね、牘を重ぬるは、文字の奴隸なり、彼の張無盡の

無邊風月眼中眼。不盡乾坤燈外燈。

柳暗花明十萬戶。敲門處處有三人嚙。

と詠じ、東坡の

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。

夜來八萬四千偈。他日如何舉似人。

と吟じたるが如き、詩中禪あり禪裡詩あり、固より尋常詞客の企及すべき所にあらず、故に文人騷客にして禪に參するもの多く、不立文字の禪者にして翰林の名を爲すもの尠からず、晋唐は巨匠多しと雖も、率ね四六駢儷なるを以て姑く措て論せず、宋に雪竇あり圓悟あり、宏智あり、或は峻峭、或は傀儡、風格を異にするも、俱に他の追隨を許さざるに至りては一なり、下りて鐔津の博にし辨なる覺範の輕にして秀なる、無文の簡にして雅なる、更に元に入りて笑隱、中峯、月澗あり、明に鼓山、慈山あり、辭句の雄健にして意趣の高妙なる古人の比して洪河巨浪玄酒大羹となすまた吾を欺かず、故に上は傳大士永嘉より下は慈山鼓山に至るまで列舉し來り批判し去らんか、支那文學史上に於て、その光彩の陸離たるもの尠からざるなり、しかも今は且く措て論せず、我國に於ける二三の巨匠に就て一瞥せんか、我國に初めて曹洞禪を傳へたるは道元な

り、固より文墨を以て論すべきにあらざるも、彼の

山居

西來祖道我傳東。釣月耕雲慕古風。

世俗紅塵飛不到。深山雪夜草庵中。

前樓後閣玲瓏起。峰頂浮圖六七層。

月冷風高箇時節。衣傳半夜坐禪僧。

の如き、その高調は夙に人口に膾炙す、降りて所謂「五山時代」に至りては、世の所謂文人騷客を一蹴し去りて、禪林文學の爲めに萬丈の氣焰を噴くものと云ふべし。

壽永四年春の嵐に、平家の一族は西海の藻屑と化し、世は鎌倉山の星月夜に源家の萬歳を謳歌したるも、武運久しからずして兵馬の權は北條氏に歸し、簡易素朴の風は、久しく戰亂に惱みたる民心に慰安を與へ、また一面には剛健な

五山文學

る禪の輸入せらるゝありて、こゝに思想界は新たなる光明に接するに至りぬ。而して此の禪の副産物として、我國の文學史上に大いなる足跡を留めたるものを五山文學となす。

蓋し五山は支那に倣へるものにして、京都に於ては、天龍、相國、建仁、東福、萬壽（此の五山の上）にして、之を京五山と云ひ、鎌倉に於ては、建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙にして之を鎌倉五山と云ふ。而して、此の五山に主たるもの多くは文字あり禪學ある宋元の歸化僧にあらずんば、特に彼國に學びたる新思想家にして、禪の宣傳者たると同時に文學の鼓吹者たりしなり。惟ふに當時に於ても公卿を中心とせる臺閣的文學なきにあらざりしも、彼の禪徒が、泉水靈にして掬すべく、風月清くして嘯くべき五山に於て、冥想し、諷誦し、精煉し、延いて十刹に及ぼし（京五山の外に等持、臨川、眞如、安國、寶幢、普門、廣覺、妙光、大善福、大慶、興聖、法泉、長樂）十刹は更に之を布きて天下に普ねからしむ、その脈絡

禪學八面觀

貫通し、呼應して、以て時代の風潮を鼓動するの便益ある、復た彼の臺閣文學の遠く及ばざる所なりしなり、而してその詩文集として今猶ほ世に傳ふるもののみを以てするも

岷 峨 集
濟 北 集
蟬 閣 外 稿
心 田 詩 稿
續 翠 詩 集
蘇 菴 集 (一名木蛇集)
流 水 集
默 雲 稿
竹 居 清 事
角 虎 集
臥 雲 集
蘆 菊 集

雪 村 友 梅
虎 關 師 鍊
瑞 巖 龍 惺
心 田 清 播
江 西 龍 派
同
東 沼 周 巖
天 隱 龍 澤
慧 鳳 翻 之
常 菴 龍 崇
同 瑞 溪 周 鳳

梅 溪 集
牛 陶 集
幻 雲 集
南 遊 東 歸 集
寂 室 錄
早 霖 集
東 海 一 漚 集
同 二 集
空 華 集
蕉 堅 菴 集
艸 餘 集
東 海 瑤 華 集
梅 花 無 盡 藏
水 拙 文 集
翰 林 胡 盧 集
宜 竹 殘 稿

禪と文學

雪 嶺 永 瓊
彦 龍 周 興
月 舟 壽 桂
別 源 圓 旨
寂 室 元 光
夢 巖 祖 應
中 巖 圓 月
同
義 堂 周 信
絕 海 中 津
愚 中 周 及
得 巖 惟 肖
萬 里 瑞 九
祖 溪 德 濟
同 景 全 周 麟

碧雲集
策彦和尚對集
三千句
島陰漁唱
桂庵對集
三益集
村庵稿

雪村怡

忠彦周良
策彦周良
同
桂庵玄樹
同
三益永固
村庵靈彦

等を初とし、一々枚舉に違あらざらしめ、後人をして、五山山靜にして禪刹水清きの邊、如何に當時の高僧碩學が研を競ひ芳を聞かはしめしかを羨望せしむ、請ふ、左にその二三の人々に就て、少しく觀察するところあらしめよ。

雪村は其字、幻空と號す、越後白鳥郷の人。幼にして元國の歸化僧寧一山に師事して左右に服勤す、稍長じて壇に登り具を受け、錫を建仁に掛く。年十八海を渡りて元に入り、元叟、端虛、谷陵等の諸老に參し、機鋒を交へて肯て讓

らす。後、湖の道場山に登り、叔平隆和尚に謁して之に事ふ。時に仁宗位に即く、仁宗は忽必烈の遺策を奉じ、侵略の念猶止まざるを以て、雪村の日本僧なるにより、その身邊を疑ひ、捉へて獄に下し、鞫訊拷問し、雪村の屈せざるや、之を死に處せんとす。然れども雪村怡然として顔色變せず、祖元の偈を朗吟して曰く、「乾坤無レ地卓ニ孤筇一。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬ニ春風。」と、刑官之を壯として赦す、これより雪村の名江湖に傳はる。既にして朝議雪村を西蜀に流す、仍て函谷關を出で秦瀟を陟り、邊僻の地に十年の歲月を送る。

身の邊僻の境に入るに隨つて、筆は一段の精彩を放てり。その岷山賦に曰く
岷山岌々天尺咫。岷水湯々濤萬里。險隘攢聳鏗鏘鋒。烟塵隔斷咸陽市。寒暄異レ候自仙都。白雪嵌レ空從ニ太始。崖前鹵井湛ニ星芒。谷匠甘泉流ニ石髓。琪玕錯落雜ニ賦硤。芝草芬々生ニ蘭芷。鸞鶴飛鳴蟠ニ赤龍。麒麟蹂躪伏ニ青兕。形勝自可ニ

暫游觀。幽奇未許窮。躋攀橋梁架。壑虹蜺背。城郭麗錦烟霞間。安憶蠶叢未開國。水豈不水山不山。汪洋磅礴但元氣。天府雄深神物慳。五丁力開戰爭路。八陣圖啓兵機關。七竅謀報渾沌氏。三分割據蝸觸蠻。誰向南柯夢炊粟。思齊北斗堆金玉。今朝荒塚盡蒿萊。昔日蒼生憂杼軸。明月隨人墮遠汀。暮雲牽恨平秋麓。苔封石鏡照無光。草沒琴臺絃莫續。曠古長懷巢許流。高風獨振箕穎曲。岷山岌岌水湯々。胡不早飯賀鴻鵠。その格調の崇高にして、詩想の富瞻なる、豈に凡庸の企及する所ならんや。赦されて長安に歸り、留ること三歳。文宗の命によりて京兆の翠微寺に住し幾くもなくして歸朝す、時に元徳元年なりき。

雪村既に歸る道聲遠近に傳はり、各地争ひ聘し、寺席を拂うて待つ。徳雲、西禪、萬壽等の諸刹に化を擧げ、後に梅尾に通る。其後、將軍尊氏強ひて雪村を招き、萬壽院に居らしむ、堅臥して起たず。後朝命を以て東山建仁寺に住す。

貞和二年十一月、忽ち病んで右手動す能はず、朝廷醫を遣はし藥餌を賜ふ。雪村從容として謝して之を却け、臘月二日、悠然として化を他界に遷す。享年五十有七、元の文宗皇帝、號を寶覺眞空禪師と賜ふ。而して雪村の生涯に就ては猶ほ一事の記すべきものあり。雪村、或時相模國由比ヶ濱を過ぐるに當り、偶、足を失して泥淖に入る、仍りて道傍の人家に至り、水を求めて衣を洗はん。とす。一老嫗あり、涕泣して出で來る、雪村その故を問へば、嫗の曰く、我に二子あり、皆出家せり、一子は遠遊して未だ來らず、且つその消息を知らず、我今や年老いて再會の期なからんことを念うて悲むと。雪村熟視すれば即ち我母なり。於是相見て悲喜交も臻り、感極つて泣く、先是雪村數金を藏して之を贈らんことを念ひ、飢凍を忍びて敢て自ら用ひず。こゝに至りて出して母に奉せりと、蓋し此の小話は、窮通あり、波瀾ある雪村の生涯に一種の彩色を加へて、情熱ある詩人としての眞骨頭を發揮す、今左に二三を抄出して彼の詩風

を知るの便に供せん。

幽谷道士

一重雲掩一重溪。春草青々路欲迷。
有客夢回丹出鼎。黃鶯聲在竹林西。

過邯鄲

莫笑區々陌上塵。百年誰假復誰真。
今朝借路邯鄲路。不是黃梁夢裡人。

九日遊翠微

一逕盤回上翠微。千秋紅葉正紛飛。
廢宮秋草庭前菊。猶帶寒花媚晚暉。

萱

澤國春風入草根。誰家庭院不生萱。

虎關

遠懷未忘憂日。白髮垂々獨倚門。

以上記する所、僅に盧山の一面を描くのみ。若しそれ全面目に至りては岷峨集十卷あり、就て看よ。

「吾國山川の淖詭なる、物産の魁殊なる、金銀銅鐵の外、珍奇衆夥なり、而も吾の歎羨する所にあらざるなり、それ山に富士あり、僧に鍊公あり、是れ吾の瞻仰する所なり」とは、本朝高僧傳の著者師蠻が曾て渠を贊する所なり、こは對比聊かその當を失するの感なきにあらざるも、その博學宏辭は長に五山文學の重鎮たるに耻ぢず。

虎關名は師鍊、俗姓は藤原、平安の人、弘安元年四月既望を以て生る、幼にして精敏偉群童に抜く、時の人文殊童子と稱す、八歳にして三聖寺の寶覺和尚に投ず、爾來孜孜内外の典籍を涉獵して得る所あり、一日、寶覺堂に上る、鍊問て曰く、如何なるか是れ正法眼藏、覺曰く破沙盆、鍊曰く、常住物を以て

自己の受用となすことをやめよ、覺曰く、唯草を打して蛇を驚かさんことを要す、鍊曰く、忽ち龍と化し去る時作麼生、覺曰く、雲を撃み霧を應むと、時に齡僅に十四、叢林傳へて以て話柄となす。寶覺死して後、南禪寺の規菴に依り次いて圓覺寺の桃溪に參じ、遍く時の名僧碩學を訪ひ、殊に寧一山に參して得る所あり、その修史の如きまたその激勵に由ると云ふ。かくて東西に遍歴すること殆んど二十年、名聲大に聞ゆ、正和二年、城西の嵯峨野に寓居す、後伏見帝の詔によりて歡喜光院に住し、屢叡問に答ふ。明年洛東白河の北涯に庵を結び濟北庵と號し、戸を閉ち客を謝して著述に従ふ。文保二年、勢州の本覺庵に赴き、嘉曆元年三聖寺に出世す。正應元年また勢州の安國寺に住す、後醍醐天皇之を官寺となしたまふ。その年九月丞相藤原氏の請によりて東福寺に住し、曆應二年、勅によりて南禪寺に住し、その夏五月、帝のために十勝論を講じて禪の蘊奧を發揮し、ますく帝の歸崇を篤うす。康永元年、後村上帝その

道譽を崇め國師號を賜ふ、同二年、光嚴上皇地を城北に賜ふ、よりてこゝに楞伽寺を建て、化を布く。貞和元年、足利尊氏、禮を厚うして招けども往かず、翌年七月二十四日、六十九を以て泊然として寂す。惟ふに、師練の本領とする所は、固より禪にありと雖も、彼の一機一境の悟に誇り、拂拳棒喝以外に禪を發揮すること能はざるの所謂禪家者流にあらず、渠は博辨宏辭、棒喝に代ふるに筆硯を以てしたれば、その著述として今猶ほ傳はれるもの頗る多く、濟北集二十卷、聚文韻略二卷、佛語心論十八卷、十禪支錄三卷、禪餘或問二卷、禪儀外文二卷、正修論一卷、禪戒規一卷、元亨釋書三十卷あり、中に於て元亨釋書は渠が最も一代の心力を盡したるものにして、我國佛教史の權輿と云ふべく、上は推古より下は元亨に至る七百年間の僧尼士庶の傳、寺宇佛家の志、國家君臣資治の表、一として備はらざるなし。左に掲ぐる所は、書成つて後醍醐天皇に奉りたる表文にして、その修史の淵由と筆力の

一斑を窺ふに足る。

臣僧師鍊竊以

聖明之代必有著述、其來者尙矣、昔者漢武之雄略也、子長纂史記焉、宋仁之寬厚也、永叔修唐書、二作之高出諸史之上者、無乃二主文思之化乎。我金仙氏之道、雖方外塵表之詮、至有撰編者、靡不繇旃矣。嘉祥之創、梁也、逢高祖之仁裕矣、西明之續、唐也、遭太宗之緝熙矣、及天壽之成、端拱也、皆泰平之標幟矣。伏惟

皇帝陛下、道出震、德重離、稟上聖之姿、膺中興之運、街談衢話、復延天之至和、祖業宗勳、授唐虞之淳化、師鍊、生無爲之清世、屬空門之斐文、僧史才疎、耻刪手於照默、宗記氣懦、謝透爪於永安、寔緇田之稗穉、禪林之樸樵者也。陛下。邁五君之德、而鍾五君之譽、師鍊乏五子之才、而成五子之事、熟念明時々繁矣、昌世々多矣、然當聖代、而茲書出焉、豈我君文思之賡化而太平之餘

標乎。今夫隋珠趙璧照乘夜光、久棄損于路傍矣、有一夫一婦拾磨拭、纒纒襲藏、玉若有知寧不怡乎、其夫不自珍、捧獻于一人、其人又雖威重、豈無動喜容乎、蓋諸師之高德不啻珠璧、七百餘年不有通傳、可謂棄損矣、師鍊匹夫之頑鄙也、視斯散落、弗能無撥襲、如是至寶、不敢私蓄、敬上陛下、弗爲僭越耳、林下蔬笋酸餽彫蟲、乞降中書、得受官校、若有可采、入大藏、行天下、於戲、瓊璠之玩弄王者之事也、匹夫唯輸貢而已、然則此書之流播陛下之任也、觸臆兢續、伏待斧鑕。

師鍊誠惶誠懼頓首頓首謹言

仲靈一筆春秋筆。埋沒湖山煙雨中。輔教遺編誰可續。緇林隸落西風。とは、渠が當時の佛教界に對する感慨にしてまた渠が抱負たりしなり。渠は宋の仲靈(明教大師)が釋門の孟軻を以て自ら居り、博辨宏辭、當時の儒林を驚倒せしめたるが如く、自ら釋門の孟軻、日本の仲靈を以て任ず、何ぞそれ抱負の壯

なるや。渠、諱は周信、義堂と號し、また空華道人の別號あり。正中二年、土佐國高岡郡の某氏の家に生る、年甫めて七歳、寺に入りて博く經史を究め、十四歳にして剃髮染衣し、道圓阿闍梨に依りて密法を受け、十七歳の時、京に入りて夢窓國師に參し、勤究十歳、こゝに印可を承け、夢窓逝て後、諸方に參歴し、三十五歳にして鎌倉の管領 足利基氏の招に應じ、圓覺寺に住し、名聲大に揚る、應安四年、上杉氏鎌倉の城北に報恩寺を創め開山となす、康暦元年、足利義滿の請によりて建仁寺を董し、彼、南禪寺に遷る、時に朝廷旨あり、殊に南禪寺を以て五山十刹の上に陞さる、蓋し殊遇なり、嘉慶二年四月四日を以て化を他界に遷す、享年六十四、その著空華集、日工集は今猶ほ傳へて永く文人騷客をして羨望せしむ。

齋藤拙堂、會て曰く、室町氏の時に文章無し、然して余僧義堂の空華集を觀るに頗る誦すべきものあり、最もその深耕説を喜ぶ、文字癡疵無きにあらざる

も、然も理を説て核實、意筆先に在り、今の世の文章家能く愧る無きや」と、室町氏の時に文章無しとは、聊か酷に失するの感なきにあらざるも、義堂を推稱するに至りては、拙堂また一隻眼を具せりと云ふべし。

蓋し五山文學は端を寧一山雪村友梅に發し、虎關の元亨釋書出づるに及び、世はその博識宏辭に驚きしも、その勢調に至りては、猶ほ清新の趣致に乏しきの感なきにあらざりき。而して義堂一たび出で、翰を振ふや、明快暢達、生氣横逸、時に駢四驪六の古調を弄することなきにあらざりしも、奕々たる精彩爛として人の眉目に逼るの感あり。今、左に會て拙堂の稱揚したる深耕説を抄して、渠を知るの便に供せん。

深耕説

空華叟郊居、無事出游、泛觀田野桑柘之間、有大麥同畝而異熟者、質諸老農、曰情農爲也、問其所以、曰、凡地耕而淺者、所種之物、必早熟而不茂、深而

耕者、所種之物、必晚成而肥碩、是以善學稼者、患於耕之淺、不患成之晚也、而彼惰者、用力弗專、所以耕有深淺、而熟有早晚也、嗟呼、今吾徒也、耕道不深、而患名之晚者、豈無愧於老農之言也耶、余竊有感於中、遂書以告同學、端介然、端介然、深耕之徒也。

漢文家としての義堂を一瞥したる吾人は、更に進んで漢詩人としての義堂を觀ざるべからず、渠、曾て詩の本領を論じて曰く

夫れ堯舜の志を知る者は二典の言なり、文王の志を知る者は周易の言なり、仲尼の志を知るは春秋なり、周人の志を知るは詩三百なり、若し夫れ吾佛心宗の徒、見性自悟する者と雖も、心法を授受するの際に至りては、亦た其の言に寓して以て其の志を示ざるを得ず、然らば則ち往古の聖若しくは賢、萬世を曠うするの遠きも、其の書を論ずるに及べば其の意を得て、則ち心照目睹猶は兩鏡相臨んで間に髪を容れざるが如し、故に曰く、死す

るものは形あり、存するものは志あり。

と、既に詩は志にして、此の志の存する所、世の相去る幾千載、地の相隔つる千萬里なるも、心々相照し靈々相通することを得、然れども、若しそれ徒に字を選び句を求めて形式を過重し、その精神を閑却するは渠の最も忌む所なりき、されば渠は當時の僧侶が此の根本義を忘れて模倣是れ事とするを歎じて曰く

今時の禪子の偈を作る、變じて俗人秀才の花鳥の詞を爲る、最も痛惜すべし假令、詩を作るにも當に禪祖の體を學ぶべし。

と、而して渠は此の主張を鼓吹せんがために、宋の眞淨覺範等以下の偈頌を蒐集して貞和集を編し、死に瀕するも猶ほこれが校定を止めざりしと云ふ。

渠の立脚地は宋元にありたるを以て、理路に涉り議論に入り、時に瘦硬に傾くの嫌なきにあらざりしも、また杜詩に熟し、唐代を閑却せざりしを以て、優

に中晚唐の聲調を帶ぶるものあり、左に最も人口に膾炙せる所のもの數首を擧げん。

夢梅

夢入羅浮小洞天。幽人引步月嬋娟。
曉來一覺知何處。雪後梅花淺水邊。

雨中對花

三年不作禁城遊。幾度東風喚客愁。
今日暮簷春雨裏。對花猶認舊風流。

子陵釣臺

漢家諸將各論功。誰訪羊裘獨釣翁。
剛被劉郎尋舊約。一絲吹斷暮江風。

次韵武陽新城新興寄序上人

百戰今誰在。千年只古城。冤魂消不盡。霸氣歇還生。
風頭蒼鷹疾。霜嚴白雁鳴。興亡天數爾。不必獨傷情。

海上會俊用章話舊次韻

惜昔遊龍寺。曾同宿鳳城。東西還一別。風月已三生。
拭目看鵬化。披襟佇鶴鳴。豈期滄海上。今夕盡歡情。

寄友

世路多南北。吟懷幾短長。欲尋千里夢。其奈九迴腸。
蟋蟀深秋雨。蒹葭昨夜霜。何時紅葉句。與我碧雲房。

題後鳥羽帝祠(二首)

承久雄圖運已窮。乾坤反蕩火炎紅。
雲中遠出蓬壺中。畫像猶存野廟中。
故國茫茫桑變海。歸心杳杳水涵空。

那知平氏功成後。甲冑仍生蟻蝨蟲。
曆數於天道不窮。萬年枝上萬年紅。
干戈起自開邊後。社稷終歸戰國中。
宴罷瑤池秋月落。春蘭輦路晚花空。

遊人不_レ管興亡事。閑讀碑文認篆蟲。

絶海名は中津蕉堅道人の別號あり。土佐國高岡郡の人、建武三年を以て生れ十三歳にして天龍寺の夢窓國師の會に投じ、十八歳にして義堂に龍山に參じ、廿九歳にして鎌倉の諸山を歴遊し、三十三歳にして明に入る、而して明の文運は、元末の詩人揭傒斯、趙孟頫、虞集等相次で世を去りたるも、楊鐵屋、高青邱、宋景濂の如き諸大家の飛躍するものあるのみならず、夢觀、竹菴、楚石、全室の如き緇衣の身にして詩壇に濶歩し頗る盛觀を極めたるの際なりければ、絶海は則ち此等諸家の間に周旋し、殊に全室に師事して大に詞章の學を修む。

全室は元の詩僧蒲室の門より出で、その等類に卓出したるを以て、此間に於て絶海の天稟の詩才と修練の功はこゝに一大發展をなし、名聲遂に風闕に達し、太祖之を英武樓に召見す、時に太祖日本の圖を指し、徐福の遺跡たる熊野の古祠を問ふ、絶海、卒然として吟じて曰く

熊野峰前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。

只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。

と、太祖も亦た筆を執てこれに和す、曰く

熊野峰頭血食祠。松根琥珀也應肥。

當年徐福求_二僊藥_一。直到_二如今_一更不歸。

英武樓上一場の佳話、以て渠が如何に天真爛熳の詩人なりしかを見るに餘りあり。永和二年歸朝し、至徳元年、將軍義滿の意に忤ひ、攝州錢原に隠れ、山水の間に傲嘯す、吟じて、曰く

世事從來多變態。當初早悟有如今。

青山高臥茅簷下。不許白雲知此心。

と、自ら詩人の眞骨頭ありと云ふべし、後、強ひられて義滿に見え、幕府に帷幄に參じ、應永八年相國寺に住し、鹿苑を兼ね、同十二年寂す、齡七十。後に佛智廣照淨印翊聖國師の諡號を賜ふ。

渠の生涯は決して單調にあらず、また平穩にあらず、その才華の進る所も亦た多方面なりと雖も、渠の渠たる所以のものはその詩人たるにあり、換言すれば詩は渠の本領なり、生命なり。請ふ、吾人をして詩人としての價値を一瞥せしめよ。

江村北海、曾て日本詩史を編するや、上は懷風藻、凌雲集より、下は蛻岩、徂徠、南郭に論及して曰く、

絶海が詩は但古昔中世に敵手なきのみに非ず。近時の諸名家と雖も、恐くは

甲を棄て、宵遁れん、何となれば古昔朝紳の詠言、佳句警聯なきに非ざるも疵病雜陳し、全篇佳なる者は甚だ稀なり、偶、佳作あるも亦た唯我邦の詩のみ、之を華人の詩に較ぶれば、殊に逕庭を隔つ。近時の諸名家と雖も、余を以て之を觀れば、亦唯我邦の詩のみ、往々にして俗習を免れ難し、絶海の如きは然らざるなり。

と、また明の如蘭、渠が詩を品定して曰く

絶海の中州(支那を云ふ)に遊ぶや、山川の壯麗、人物の繁盛を觀、高きに登り、深きに俯し、今に感じ、古を懷ふて、一に詩に寓す。吾が中州(支那)の士、文學に老いたるものも是に過ぎざるなり、且つ日東の語言氣習なく、誠に海東の魁、想ふにその右に出づるものなけん。

と、惟ふに、嚴密なる意味に於いては日本に漢詩なかるべし、否漢詩なきにあらざるも、そは所謂日本の漢詩にして、支那の所謂詩なるもの尠きなり。蓋し

我國に於て漢詩と云ふも、多くは唯その形式を模したるのみにして、音聲韻律に至りて諧調せざるを奈何、是れ彼此の語脈相異なるを以て已むを得ざる所ならんも、絶海に於ては、その形式に於て卓絶したると同時に、音聲韻律に於ても純熟したり、是れ實に渠が我國に於て古今獨歩の稱ある所以なり、而してその胸襟の脱洒なる、行動の飄逸なるまた更に渠の價値を昂上せしむに足るものあり。渠は實に五山文學の巨人たるのみならず、我國に漢詩ありて以來、唯一の詩人と云ふも過言にあらざるべし。今、その最も人口に膾炙せるものに就て二三を抄録せんに、先づ七絶に於ては

折枝芙蓉

楚妃醉因倚西風。曾侍君王宴洛宮。

鳴佩歸來秋淡々。殘粧影落玉屏中。

是れ山頼が論詩絶句の中に、衣中廿八顆明珠。風雅終然墮筍蔬。出類故當

推絶海。指揮如意掣鯨魚。と贊して推服したるものなり。

讀杜牧集

赤壁英雄遺折戟。阿房宮殿後人悲。

風流猶愛樊川子。禪榻茶煙吹鬢絲。

梅花帳

帳裏梅花小如斗。誰傳新樣自江南。

使三人幾宿羅浮月。夢破曉堂雲一龕。

雨後登樓

一天過雨洗新秋。携友同登江上樓。

欲寫仲宣千古恨。斷煙疎樹不堪愁。

題扇面圖

浪花吹雪映山明。五老雲開紫翠生。

亂後潯陽無隱者。九江煙雨一舟輕。

題梅花野處圖

淡月疎梅野水灣。何人注意寫荒寒。
一枝影瘦清波上。應是孤山雪後看。

盆 蘆

一掬盆蘆涼露浮。輕風吹送小颼々。
因思十歲繫舟處。細雨疎煙水國秋。

春 夢

蝶入南華曾栩栩。相逢欲語意綢繆。

一從宋玉賦成後。暮雨朝雲總是愁。

一誦^{せう}し來りて風神瀟洒、義堂等の及ばざる所なり、更に轉じて排律を見んか、
五律に於ては、

東營秋月

秋夜關山月。高懸細柳營。中軍嚴下令。萬馬肅無聲。
寒影旌旗濕。斜光睥睨明。何人橫槊賦。愁殺老書生。
格調の高雅、措辭の雄健、容易に他の企及すべからざるものあり。
七律に於ては

錢塘懷古次韻

天目山崩炎運徂。東南王氣委平蕪。
鼓聲聲震三州地。歌舞香消十里潮。
古殿重尋芳草合。諸陵何在斷雲孤。
百年江左風流盡。小海空環舊版圖。
興亡一夢歲云徂。葵麥春風久就蕪。
父老何心悲往事。英雄有恨滿平湖。

朱崖未洗三軍血。瀛國空歸六尺孤。
天地百年同戲劇。燕人又獻督亢圖。』

多景樓

北固高樓擁梵宮。樓前風物古今同。
千年城塹孫劉後。萬里鹽麻吳蜀通。
京口雲開春樹綠。海門潮路夕陽空。

英雄一去江山在。白髮殘僧立晚風。

格調の雄渾にして骨力ある、眞に五山詩僧中の翹楚なり。

其他、中巖圓月の

金陵懷古

人物頻遷地未磨。六朝咸破有山河。
金花舊址商漁宅。玉樹殘聲樵牧歌。

列壑雲連常帶雨。大江風定尙生波。
當年佳麗今何在。遠客蒼茫感慨多。
の如き、風格、絶海に逼らんとするものあり、別源圓旨の

遊石頭城

故國山河幾變更。英雄埋骨不埋名。

楚雲兼雨連鍾阜。淮水接潮回石城。

世路區々迷蝶夢。江湖渺々冷鷗盟。

白頭僧在興亡外。一卷楞嚴證道情。

の如き、試みに元人の集中に措くも、誰か敢て之を識別せんや、別に五山の寰
中を去りて大智あり、旨を瑩山に明め法を明峯に得、鎮西の一隅に隠れて、截
斷人間是與非、白雲深處掩柴扉、當軒栽竹別無意、祇待風來宿時一吟
じ、時に山を出で、菊池家を接したるのみにて、殆んど巖居川觀に近き活計を

禪學八面觀

打したるを以て、當時に於ては都門縉紳の間にその名を知られざりしも、道力の深き詩偈の妙なる、五山以外に別に一旗幟を樹つるものと云ふべし、その二三を摘記せんか。

魚籃

翠黛畫眉纖月淡。春風滿面小桃紅。
見人放下籃兒去。三十六鱗皆化龍。

笠津遠望

篷窓冷對一江秋。智境融時見處周。
岸上青山雖不動。波心明月去隨流。

畫橋

兩岸蒼煙山有色。一川明月水無聲。
毫端點出機前路。人在虹蜺背上行。

蓋し、平安朝の文學は婉麗にして巧緻、一見、人目を眩惑するに足るが如きも、その實は六朝緜麗の餘風を傳へて雄渾蒼勁の調なく、元薄白俗の弊習に侵されて清新剛健の氣韻に乏しかりき、而して之を一新して、豊富なる思想と、清新なる趣味と、雄渾なる風格とを以て文學史上に一大革命を與へたるは、偏に五山僧侶の功績に歸せずんばならず、若しそれ、之を以て、彼の歐洲中世史に於けるベネチアの僧侶のなせし事業と同一視し、僅に前來の文運を辛うじて香煙一縷の中に維持せしに過ぎざるものとなすが如きは、未だ以て五山文學の眞價値を解するものと云ふべからず、五山文學の研究豈にそれ容易ならんや。

徳川時代に入りては、最も世の注目を惹きしは、隱元、心越等の渡來なりと云はざるべからず、明末諸師の東渡は黃檗禪の流行となり、時人、評して「隱元の徳、木庵の道、即非の禪、南源の詩、悅山の書、逸山の畫」と推賞するに

禪と文學

禪學八面觀

至り、沈滯せる當時の禪林に一大動搖を與へたり。

隱元、諱は隆琦、福州福清の人、承應三年渡來し、寛文元年、黄檗山萬福寺を開創し、禪風大に振ふ、後水尾太上天皇の御欽仰を得、諸侯宰官居士等の歸崇するもの尠からず、而して隱元以後、明匠相續て出で、黄檗禪はあらゆる方面を風靡し、殊に翰墨詞章に及せる影響に至りては、今猶ほ「黄檗もの」と稱せられ、斯界に渴仰せられつゝあり、今はたゞ個々に就て評論するの違なきを憾む。

隱元以外に忘るべからざるは、東臯心越の渡來なり、諱は興備、字は心越、東臯と號し、法系は曹洞に屬す、延寶丁巳、長崎に抵り、天和癸亥、水戸に入り、大に義公の歸崇を受け、岱宗山天徳寺（後に革めて壽昌山祇園寺と稱す）に開堂するや、義公書を寄せて

祖師西來止、異參同參皆共參、佛法東漸兮、千派萬派區其派、直指生詳母、

横眼出ニ一枝、自非發大善知識之大知、維墜緒之將絕、誰能開正法眼藏之正眼、挑傳燈之既微、於惟明心越大禪師、鹿門遺孫、東苑嫡脈、人中僧伽彼、世上優鉢華、業行淳修、以戒以定、以慧、虛求幽鑽、于釋子道于儒、颯乎凌虛、浩然分化、雖培根莖於震且之且、將結華實於皇朝之朝、西南異方、荆棘塞路、生僧牧童倒吹無孔鐵笛、奈何庖丁徒空不鈍利刀、波受釋風愛收、時既至機既熟、寡人只願、早齊吾車、偉三門之壯觀、永掛師錫、卓一山之清規、鳳翔鳥從、羊羶蟻萃、揮手裏拂、穿食殘針、補綴僧伽黎之破壞、河水搏躍、直上倚宗、佛日高懸、恢囑天德、隨啓可勝翹瞻企望之至。

元祿五年歲次壬申冬十月初六日

前權中納言西山源光國拜

而してその化を他界に遷すや、義公、親しくその墳を展じ、一偈を打して曰く

謹詣越師墳墓前。叫天打地欲驚眠。

一朝挑起法燈火。照破東方萬八千。

禪と文學

以てその如何に崇敬追慕の情の深かりしかを察するに足る、かくの如く心越の東渡は鉦公義公を感化し、森尙謙、安積澹泊、人見鶴山、同子傳等の水藩の鴻儒、皆その徳に服し、僧中に眞儒ありと嘆賞するに至る、心越、詩に書に畫に琴曲に巧みに、拈じ來りて教導の武器となす、今、詩偈二三を録して、その格調を知るの便に供せん。

月梅

雪後孤山分別幽。不須放鶴且優遊。
斷橋流水和明月。一脈清芳尙未收。

呂祖

長安一枕臥雲房。夢裡何曾返故鄉。
識破從前榮辱境。洞庭風月自悠揚。

次韻

傲霜沍露向東籬。千古高風合未衰。
觸目儼然三徑裡。年々待發不萌枝。

詠梅

瘦倚孤山畔。冲寒綴玉花。素姿甘澹泊。傲骨領煙霞。
心越逝後、之を恢弘するの英傑を得ず、その禪風は水府の一隅に偏在するの已むなきに至れり。

蓋し、徳川時代に於ては、禪機に至りては、白隠あり、盤珪あり、天桂あり、月舟あり、廣く甘露の門を開きて四衆を接したるも、詞章に於ては、隱元、心越等の感化を以てその大なるものと云はざるべからず、しかも此の時代に於ては文運大に進み、儒林の大家、鬱然として四方に崛起したるを以て、之を五山時代に於ける禪僧獨占の時代に比すれば、陸離たる光彩に乏しきを感じざるを得ず、是れ時代の推移、已むを得ざるものか。

七 禪と文學（下）

和歌は我が國民の生める特殊の文學なり、佛教一度我國に傳來するや、歴代の高僧碩徳之を用ゐて教化の材となし、貴顯縉紳相應じて唱和し、後拾遺に至りては「釋教」の一部を設けられ、それより、法華、維摩の高尙幽玄の想は巧みに婉麗の歌詞に詠み出され、更に禪の傳來によりて、ますますその内容を豊富にせり、曹洞禪の傳來者たる道元禪師の如き「久在人間無愛惜、文章筆硯既拋來、看花聞鳥風情少、一任時人笑不才」と吟じ、越の山中に在りて専ら古風を宣揚せられたれば、世の所謂繪章繡句を以て批すべきにあらざるも、その物に感じ事に觸れて、自然に毫端に溢れ、人口に膾炙するもの尠からず、今一二を擧げんに

不立文字

いひ捨しその言の葉の外なれば

筆にも跡をとゞめざりけり

坐禪

濁りなき心の水にすむ月は

波もくだけで光とぞなる

坐禪

守るともおもはずながら小山田の

いたづらならぬ僧都なりけり

その想、その調、幽遠なりと云ふべし、

降りて、太田道灌の如き、その主とする所固より吟詠にあらざりしも、當時

の武將に在りては、大に異彩ある人物にして、後土御門天皇は

武藏野はかる茅とのみ思ひしに

禪と文學

かゝる言葉の花もありけり

との御製を賜ひ、渠の道友萬里は「倭歌三昧、文武兼并」と稱揚せり、渠は禪を雲岡舜徳に得、青松寺を建て、之を請し、靜勝軒を築きて、時に心を冥想に凝らし、その吟詠中には津々として禪味の掬すべきものあり、彼の人口に膾炙せる。

短慮不成功

急がずば濡れざらましを旅人の

あとよりはるゝ野路の村雨

の如き、また、後土御門天皇に上りたる

露おかぬ方もありけり夕立の

空より廣き武藏の野原

の如き、たゞに武藏野の廣原を詠じたるものとのみ解すべきにあらず、世事紛

紛の中にありと雖も、渠が胸中綽々たる別天地のあるを披瀝したものにあらずや、また、

かゝる時こそ命の惜しからめ

かねて無き身と思ひしらずば

と詠じたるが如き、渠自身は既に「かねて無き身」の端的を得たるものと見るを得べし。

徳川時代に入りては、和歌禪を能くするもの、澤庵あり、無難あり、盤珪あり、俱に柔言綺語の中に斯道の妙所を味はしむ、中に於て、澤庵は、細川玄旨烏丸光廣等と方外の交あり、その和歌は多く光廣の批判を経たるものなりと云ふ、左にその二三を記せん。

歳暮

とやせまじかくやせましとおもひつゝ

今年もけふを限りとぞなる

光廣評して曰く、一とせの暮るゝのみかは人生かくのごとくなるべし

更衣

鹽たる、墨染ながら世の人の

おなじこころのころもがへかな

光廣曰く、すみの衣手の衣更様かはりて感ふかし

瞿麥

たらちめの生したつるもかくばかり

あさのめぐみの露のなでしこ

光廣曰く、天地の恩父母の恩、草木とても人倫にかはらすの心、感ふかし

野宿

むさしのはやどりとふべきかたもなし

いく夜尾花をかたしきのそで

光廣曰く、美麗

釋教

夢破る心の月もひかりそふ

雲のはやしのあかつきのかね

光廣曰く、この御歌は、さして釋教の題なれば、なか／＼はゞかりあり

祝言

つくば山ふかきめぐみの蔭にすむ

民のかまどはゆたかなりけり

光廣曰く、つくば山のふもとよりしげき御惠、民のかまどのにぎはひ候はんこと、千秋萬歳、至祝珍重に候

以て、その格調の誇るべき無きも、誘導啓發の一助として、また可なりと云はざるべからず。

禪と文學

禪學八面觀

澤庵の和歌を評したる烏丸光廣、また尋常の詞人にあらず、大徳寺の春屋、および澤庵、興聖寺の虚應等に歴參し、遂に一絲の下に於て、趙州無字の話を看して大疑團を破る、その投機の偈に曰く、

咬三當無字一齒先亡。端的咬時無盡藏。

即佛即心阻三萬里。風吹三馬耳畫梅香。

その和歌に於て、最も人口に膾炙するもの、一二を擧ぐ、

本來面目

花ざかり見し人いづら塵一つ

積らぬさきのみよしの山

不知題

さればとて覺めずもあれなまよひては

とても夢見る此の世なりせば

無難は、濟家の巨匠にして、門庭峭峻、宗風孤危、衲子自ら崖を望むで退く。米澤侯紳商白木氏(今の白木屋祖先)等、その教を受くるもの尠からず、人の禪要を問ふあれば、和歌を詠じて之に示す、その什頗る多し、

大道を問ふ人に

おもはねばおもはぬ物もなかりけり

おもへばおもふ物となりぬる

修行に力つきし人に

身のやぶれはてたる時のころこそ

おきに萬法一如なりけり

世をすつることを問ひしに

すてゝみよ浮世の外のおもひ出に

しかもうき世にすみぞめの袖

禪と文學

生死即涅槃

いきしにもしらぬところに名をつけて

ねはんといふもいふばかりなり

應無所住而生其心

すむところなきを心のしるべにて

そのしなくにまかせぬるかな

無題

なしといへばあるにまよへる心かな

それをそのまゝそれとしらねば

悟の道を詠めといひしに

をしへにもならひにもなき物なるに

誰がまことよりしりそめにけん

道を問ふに

うぐひすの子はまがひなき子規

何とて聲の別になるらん

盤珪、名は永琢、盤珪はその號なり、道眼圓明、而して人を接する懇到、化遠近に徧く、大石義雄の如きも曾て、その爐鞴に入りたるは、前に述べたるが如し、能く和歌を以て人を導く、その二三を擧げんに

偶成

さしむかふ人は清きみづかきみ

よしあしうつるかげはとどめじ

同

我はたゞ虚空を家と住みなして

かすみ枕にひとりねの春

禪と文學

同

耳に見つ目に聞く時は何事も

まことの法のむねにかなはむ

同

ふる桶の底ぬけはてゝ三界に

一圓相の輪があらばこそ

本心の歌

不生不滅の本心なれば、
かりの火宅に心をとめて、
生れ來りし古へとへば、
來るが如くに心をもてば、
をしゃほしやと思はぬ故に、
金をもつたりや貧者がいやし、
戀しゆかしも唯今ばかり、
惡をきらふを善ぢやと思ふ、

地水火風は假の宿、
われからもやして身をこがす、
何も思はぬ此の心、
直に此身は活如來、
今は世界が我が物ぢや、
またぬ昔を忘れたか、
逢はぬ昔を忘れたか、
きらふ心が惡ぢやもの、

うれし目出たや老せぬ君と、
奇妙不思議は一つもないぞ、
後世を願ふとてひいきなれがふ、
安養世界はこゝぢやもの、
有爲の轉變我が爲す事を、
無爲の心はもとより不住、
過去も未來も本心ばかり、
心とめず浮世もあらし、

めぐり逢ふたり唯ひとり、
知らじや世界が皆不思議、
いとど我慢をそへてかし、
五萬々々のおくはなし、
知らで逢ふて身の蟲鼠、
知らで逢ふは我が損よ、
心留むより思ひきりやれ、
峯の松風まつへ吹く、

不生不滅の本心なれば、
假の火宅に心をとめて、
夢と思へば浮世の中は、
むかし思へばゆふべの夢ぢや、
うそな世界をまことのやうに、
いつか五欲を身にならばして、
人にをしへばもとなぬものぢや、
年はよれども心はよらず、
佛道修行つとめし後は、

地水火風ばかりの宿、
我ともやして身をこがす、
うきもつらきもなきものぢや、
とかく世界はみなうそぢや、
化しはかざるげけものぢや、
それにならうて目をくらす、
是非を争ふ我身なり、
常にかばらぬ心のこゝろ、
何もかはりは得ぬもので、

迷い悟りばもとないのちや、
後世のつとめも此頃いやと、
さとの心を我ちやとおもへ、
さとり／＼と此頃せれば、
よきもあしきも一つにまるめ、
死んで世界に夜盡くらせ、
とかく浮世はもとないのちや、

親をなしへぬならひもの、
出入の息のあり次第、
念と念とですまふとる、
朝の寢覺も氣が軽い、
紙につゝんで捨ておけ、
それで世界が手に入るぞ、
心とみより唯うたへ、

白隱

白隱、諱は慧鶴、白隱はその號なり、その法幢を建つるや、道俗雲集し法席の盛なること前古稀に觀る所、禪林相稱して五百年間出の大宗匠と云ふ、その翰墨三昧に入るや、一點一畫の間に能く禪味を發露し、その和歌を詠するや、粗言細語の中、深く教外の妙旨を味はしむ、彼の和讃の如き、一種變態の長歌にして、固より應機接物の活手段、深く文藝上の價値を以て論すべきものにあらざるも、稱してまた一種の和歌禪と云ふも妨げず、坐禪和讃、安心ほこりた記、大道ちよぼくれ、施行歌、主心お婆粉引歌の如き、その應機接物の好方

便を看取すべし、左に坐禪和讃を擧げてその一斑を示す、

衆生 本來佛なり、

水をはなれて氷なく、

衆生近きを不知して、

縱令ば水の中に居て、

長者の家の子となりて、

六趣輪廻の因縁は、

闇路にやみち踏をへて、

夫れ摩訶衍の禪定は、

布施や持戒の諸波羅蜜、

其品多き諸善行、

一座の功をなす人も、

水と氷の如くにて、

衆生の外に佛なし、

遠く求むはかなさよ、

渴を叫ぶ如くなり、

貧里に迷ふに異ならず、

己が愚痴の闇路なり、

いつか生死をはなるべき、

稱歎するに餘りあり、

念佛懺悔修行等、

皆な此中に歸するなり、

積し無量の罪亡ぶ、

惡趣いづくにありぬべき、
 辱くも此の法を、
 さんたん隨喜する人は、
 いはんや自分回向して、
 自性即ち無性にて、
 因果一如の門ひらけ、
 無相の相を相として、
 無念の念を念として、
 三昧無碍の空ひろく、
 此時何をか求むべき、
 當所即ち蓮華國、
 澤庵、無難、盤珪、白隱は俱に臨濟下の尊宿なり、今、曹洞に之を求むるに

淨土即ち遠からず、
 一たび耳にふるゝ時
 福を得る事限りなし、
 直に自性を證すれば、
 すでに戲論と離れたり、
 無二無三の道直し、
 行も歸るも餘所ならず、
 謠ふも舞ふも法の聲、
 四智圓明の月さえて、
 寂滅現前するゆゑに、
 此身即ち佛なり。

は、先づ天桂を推さざるを得ず。
 天桂、諱は傳尊、天桂はその號にして、また滅宗、老螺蛤、老米蟲、腫眠樓の別號あり、森嚴の宗風を以て稱せらる、或時「船歌」を作りて、參徒に與へて曰く、

あれはいづくの船ぢややら、生死無常の大海に、
 風にまかせて乗出す、四大の板を假りあつめ、
 出入の息のかりの釘、心一つの帆柱に、
 眼耳鼻等の六枚帆、帆を十分に引上げて、
 まとも行くはよけれども、ちと傾けて開くのが、
 舟のりての上手さよ、表揖取揖ゆるすまじ、
 いづれの方とあてもなく、灘をしらざる船頭は、
 覺束なくも思はるゝ、瞋恚の浪の立つ時は、